

## 第一節 石鍋製造と流通

## 一 石鍋の生産地

古代末期から中世にかけて土鍋・瓦質鍋・鉄鍋などの煮沸具が使用されたが、その中にかつて石鍋いしなべも含まれていた。石鍋は滑石かたせきといわれる硬度一の石材を利用して作られており、考古学の世界では一般的に滑石製石鍋（以下、石鍋とする）と呼ばれている。石鍋はその形状から縦耳型と鏝付型つぼみに分けることができ、前者は十世紀〜十三世紀、後者は十四世紀〜十六世紀に製作されたと位置づけられている。近年、発掘調査の成果（以下、消費地とする）により石鍋は日本のほぼ全域で確認され、石鍋を使用する文化が幅広く浸透していたことが想像できる。

発掘調査によって出土した石鍋は、出土した遺跡の性格・特徴もあって、生産地・流通・再加工などの問題が提起されているが、石鍋は小破片で出土するため、これらの問題を解決することは決して容易なことではない。特に流通の問題は全国の中継地的要素をもった遺跡を調べる必要があるため、全国規模でこの問題を解明するには調査事例の増加を待たなければならぬ。

石鍋の生産地は古くから西彼杵半島が注目されてきた。特に雪浦（西海市大瀬戸町）は明治時代には全国誌に登場しており、その後の長崎考古学会の調査舞台となっていく。生産地は西彼杵半島以外にも福岡県糟屋郡久山町・福岡県大牟田市・山口県宇部市・長崎県長崎市などで確認されているが、生産地における石鍋製作所跡（以下、製作所跡とする）の規模は圧倒的に西彼杵半島が大きい。隣接する長崎市の製作所跡も西彼杵半島に比べ規模・遺跡数は少ない。石鍋の石材である滑石は蛇紋岩じょうもんがんの熱変成作用によりできる鉱物で、西彼杵半島の山中を踏査すると滑石の露頭を確

認することができる。特に西海市西海町と同市西彼町は滑石の露頭が多く、過去にそれを利用して石鍋が切り出され、現在も切り出した痕跡が至る所に残っている。切り出された後の石鍋は荒削りされ、鍋としての原型が作り出される（石鍋未製品・以下、未製品とする）。人がほとんど立ち入らない場所には未製品が散在している場合があり、中には鍋以外の未製品（例えば匙さし）もみることがができる。生産地には多くの痕跡が残されており、今後、それをもとにした石鍋の研究分野の解明が課題とされる。

生産地の調査は大正十三年（一九二四）の長崎考古学会・昭和四十八年（一九七三）の長崎県立美術博物館・昭和五十五年（一九八〇）の大瀬戸町教育委員会・平成八年（一九九六）の西彼町教育委員会によって実施されてきた。発掘調査の成果は近年増えつつあるが、生産地は消費地に比べ事例が少ないため製作所跡の全容解明までは至っていない。しかし、未製品の切り出しから加工に関しては大きな成果をあげている。特に八重津輝勝・内山芳郎両名と下川達彌の成果が後の研究者に与えた影響は大きい。八重津は大正十三年、春山に登頂して二カ所の製作所跡を発見、第一洞・第二洞と命名した。これは現在の目一つ坊A―1とA―2に該当し、春山の西側に位置するクレバス状の製作所跡である。更に内山はこれらの反対側に位置する製作所跡も報告しているが、これは現在の目一つ坊B―1に該当し、春山の東側に位置することが確認されている。両名は岩壁面から未製品をはぎ取る際の案として、平面離断法・鋭角離断法（[図7-1](#)・[図7-2](#)）の二種の製作技術案を、更に、その後の未

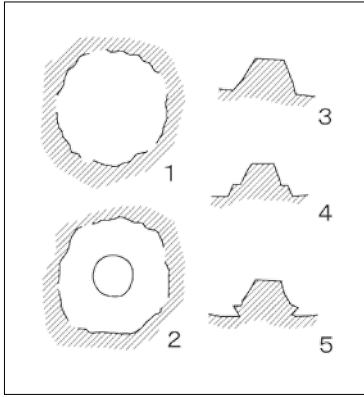


図7-1 石鍋裁断面図（八重津・内山案）

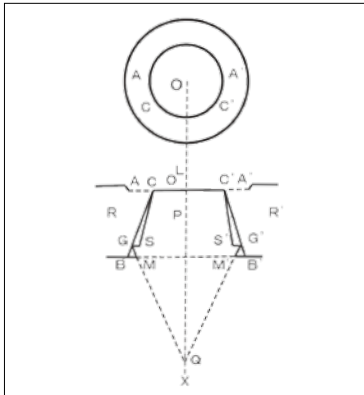


図7-2 石鍋裁断面模式図（八重津・内山案）

製作技術案を、更に、その後の未

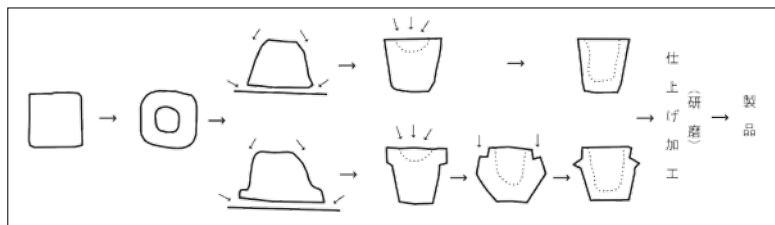


図7-3 製作工程図①(下川案)

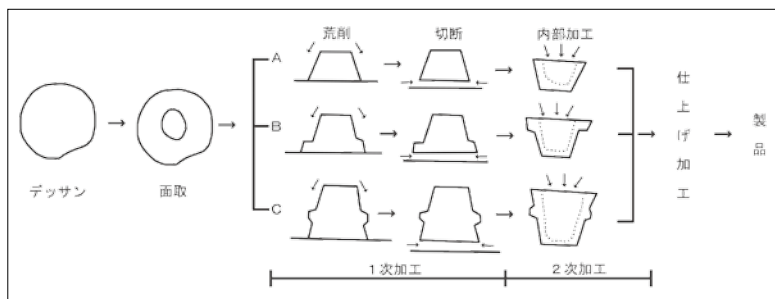


図7-4 製作工程図②(副島案)(1)

製品が石鍋に加工される製作工程案も併せて発表した。これら一連の製作技術に関する案は製作所跡に残るはぎ取り痕の状況と周辺に散在する未製品の観察から行われており、科学的な観点による考察といえ、当時としては画期的で長崎考古学会の精力的な活動がうかがえる。ここで発表された製作工程案は昭和四十年代後半～昭和五十年代の下川による生産地研究の基礎となっていく。八重津・内山両名の研究以降、生産地の研究は特に目立った進展はなかったが、昭和四十八年(一九七三)に下川「滑石製石鍋考」によって大きな変化を遂げる(図7-3)。

下川はこれまでの石鍋研究を体系的にまとめ、更に「方形区割り」といわれる岩壁面から四角形ブロックを切り出す製作工程案を発表した。四角形に切り出したブロックの四カ所の辺から耳状の把手を作り出し、最終的には四カ所あるいは二カ所の縦耳型石鍋が完成する。この案は壁面に「方形区割り」を行うことで、無駄なくブロックを切り出し、更に四辺から突起幅が長い縦耳(縦耳の厚み)を産出できる。もちろん、耳の長さも自由に調節することが可能で、発掘調査で出土する縦耳型の大半はこの製作工程案に該当するものといえよう。下川の案は合理的な産出に基づいたもので、作業効率も上がることで生産性も向上したと考えられる。更に、昭和五十五年(一九八〇)、下川は石

る。下川の一連の製作工程案はその後の編年研究に一石を投じることとなる。氏は製作工程を科学的に分析することで、生産地から消費地への時間経過、すなわち流通に関する問題も間接的であるが提起している。石鍋の研究分野に与えた下川の業績は大きい。

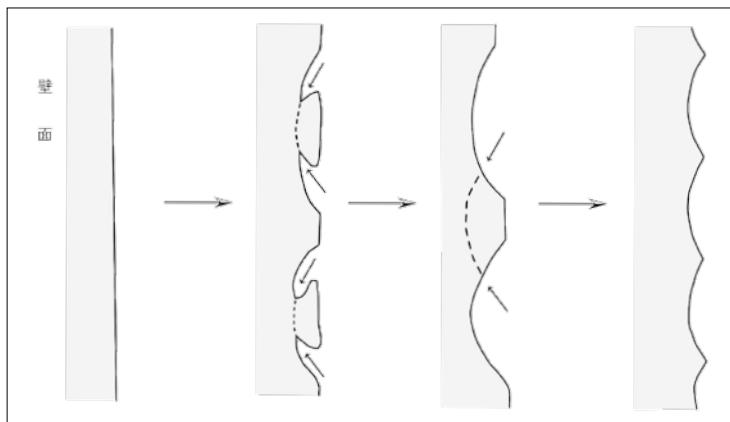


図7-5 製作工程図③(下川案)

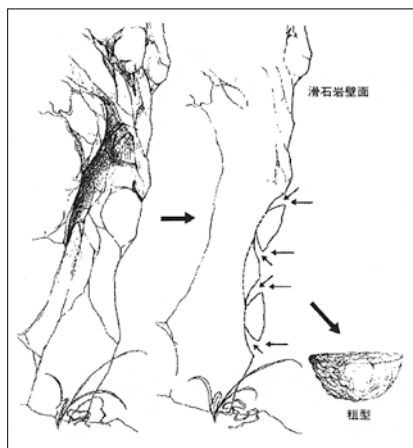


図7-6 製作工程図④(下川案) (2)

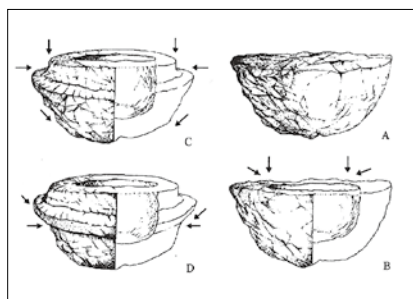


図7-7 製作工程図⑤(下川案) (2)

鍋の口径と底径の差が二分の一のものは「自由に製作」されたとした見解を発表している(図7-5・7-6・7-7)。岩壁面から未製品のプロックを成形する際、口縁部から底部の順に粗形を作り、最後は壁面からすべてをはぎ取る。壁面には凹凸ができるが、次に凸状の部分で底部の粗形としながら、口縁部を作り出す。この作業工程を滑石層がなくなるまで続ける。壁面にはクレター状の加工された痕跡が残ることとなる。現在、西彼杵半島の一部の製作所跡にはこうした痕跡を残すものもみられる。



写真7-1 ツル掛第二 石鍋製作所跡

帯は蛇紋岩の鈹床帯が集中する所で、滑石はこの鈹床帯の分布と一致する(図7-8)。滑石は蛇紋岩の熱変成作用によって生成されるので、蛇紋岩と滑石の関係が成立することとなり、蛇紋岩の鈹床帯が確認できれば、付近に製作所跡の存在を想定することができる。

全国から出土する石鍋の多くは破片で出土するものが多いため、生産地の特定は困難である。これまで、生産地を特定する試みは化学的な分析を含め、様々な角度から行われてきたが、生産地のサンプルが少ないため場所の特定は困難であった。ただ、全国的にも西彼杵半島の製作所跡は桁外れの多さ・規模を有することから、出土資料の大半は西彼杵半島産としても過言ではない(地理的な状況から必ずしも西彼杵半島産としない場所がある)。

東彼杵・大村地区で確認される石鍋や滑石製品は西彼杵半島産である可能性が高い。具体的な製作所跡の地点や東彼杵・大村までの搬出経路は不明であるが、大串(形上)村松の入り組んだ地形をみるかぎり、海路を使った搬出が行われたことが想定される。

次に東彼杵・大村で確認される代表的な滑石製品をみていきたい。

西彼杵半島の製作所跡は西海市西海地区から西海市西海地区にかけて分布が集中する(図7-8)が、大瀬戸・琴海・外海地区の分布に対し圧倒的な数といってもよい。西海地区は伊佐ノ浦川沿いに、西海地区は大串・平山郷にかけて製作所跡が集中する。この一

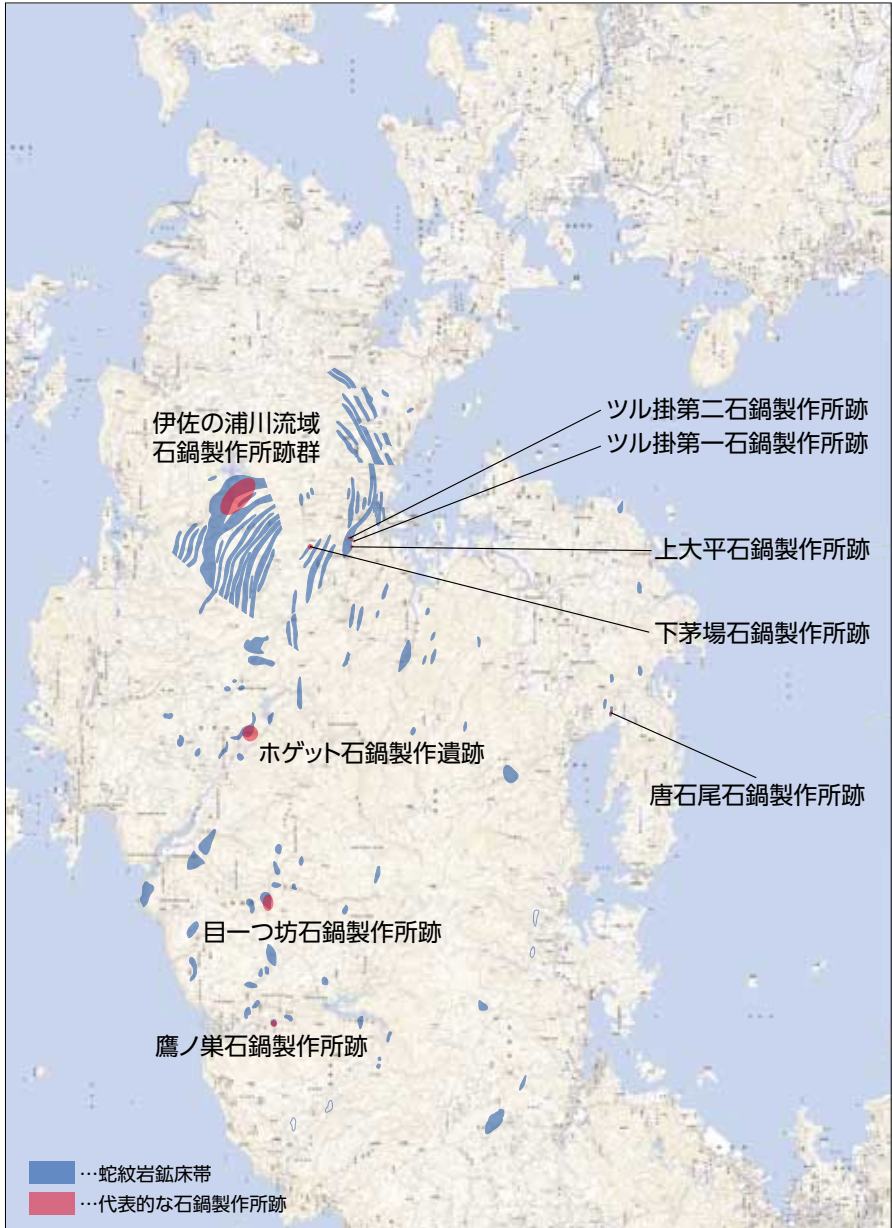


図7-8 石鍋製作所跡及び蛇紋岩鉱床帯分布図(3)

## ◆ 大村湾における滑石製品出土遺跡 (図7-9)

東彼杵・大村地区では石鍋をはじめとする滑石製品の出土が確認されている。石鍋は古いもので十世紀代のものも確認されており、古くから西彼杵半島とつながりがあったことがうかがえる。当該地域の発掘調査によって滑石製品、特に石鍋の出土は多数確認されているが、時期が古くなるものについては数遺跡にとどまる。県内全域をみても縦耳型石鍋を出土している地域は少ない。また、この地域から縦耳型と同時期の滑石製経筒の出土が確認されている。滑石製経筒は県内地域でも佐世保市広田町三島や諫早市長野町で報告された例があるが、当該地域からは八点の経筒が報告され、数の多さが注目される。そして、これらの石鍋や経筒は大村湾を囲むように存在しており、生産地である西彼杵半島を中心とした流通が展開されたことが推定される。次に主な各出土遺跡の概要を説明する。

### ■ 一、白井川遺跡(東彼杵郡東彼杵町)

彼杵川に広がる標高三〜七メートルの縄文時代(中世)の複合遺跡である。調査は昭和六十二年(一九八七)、圃場整備事業に伴って実施。結果五万点に及ぶ遺物が出土しており、中世では青



図7-9 大村湾における主な滑石製品出土地分布図

磁・白磁の出土が半分以上を占めた。石鍋は五〇点が確認されており、形状は鏝付型で占められていた。

その中でも桶状石鍋といわれる把手を持たないものが確認されているが、これは縦耳型の破片の一部あるいは耳の部分で削ぎ落したものと考えられる。生産地で確認される未成品は縦耳型と鏝付型であるため、消費地で確認される石鍋は二種の完成形でなければならぬ。したがって、これに該当しないものは改良又は改変を加えたものといえ、桶状は改良・改変されたとする考えが妥当であろう。この結果から、石鍋は十世紀～十三世紀とした時期幅が設定できらる。

## ■二、寿古遺跡（大村市寿古町）

那川河口の扇状地に位置する。平成元年（一九八九）と平成二年（一九九〇）に圃場整備事業に伴う調査が実施され、結果、旧石器時代から近世までの遺跡であることが判明した。特に中世の遺物が多く出土しており、十二世紀後半の土師器・輸入陶磁器・滑石製品の出土が目立つ。石鍋は縦耳型と鏝付型の両型式が確認されており、その型式から十世紀～十三世紀の年代幅が与えられる。また、二次加工品も出土しており、バレン状石製品・石錘などが出土しているが、いずれも石鍋を再加工したと思われる。

## ■三、玖島城跡（大村市玖島一丁目）

遺跡は玖島城跡に位置する縄文時代・中世・近世の複合遺跡である。一部、滑石製品の出土が確認されているが、石鍋の底部で二次加工を施し皿へと転用したものである。この資料の時期は石鍋の形態を崩しているため相対的年代の比定は困難であるが、同調査区で黒色土器が出土していることから縦耳型石鍋の時期と思われる。縦耳型の体部が壊れた後に残りの良い底部を使って皿が作られたと考えられる。石皿の報告例は少なく、生産地に近い場所で行われた事

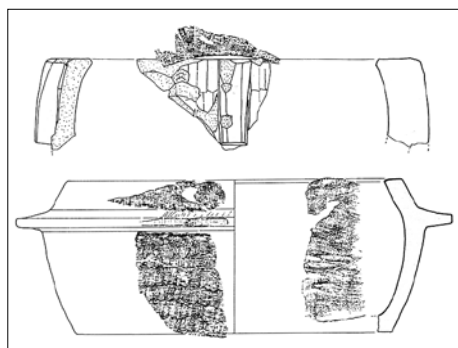


図7-10 寿古遺跡出土石鍋(4)



例は初めてであろう。

#### ■四、伊木力遺跡(諫早市多良見町)

大村湾の南側に位置する縄文時代・弥生時代・中世の複合遺跡である。当遺跡は縄文時代で有名な遺跡であるが、中世の遺物も出土している。石鍋も出土しており、形状は縦耳型・鏝付型の両型式が確認されており時期も十世紀から十三世紀までの年代が設定できる。地理的な条件から生産地との流通が想定される。なお、縄文時代前期中葉の西唐津式・後葉の曾畑式土器にも滑石の粉末が混入されており、生産地から石材を調達したことがうかがい知れる。

#### ■五、竹松遺跡(大村市竹松町)

郡川流域に存在する縄文時代から中世にかけての複合遺跡で、近年、大村市によって調査事例が報告されている。縦耳型石鍋が出土しており、古代末期から中世にかけて当遺跡の姿が解明されつつある。

#### ■六、箕島経筒(大村市箕島町 写真7-2)

現在、長崎空港となつてゐる箕島から文治元年(一一八五)銘の滑石製経筒が出土している。発見に至る経緯は不明であるが、大正時代に畑を開墾している途中に出土したといわれる。経筒の大きさは直径二七<sub>センチ</sub>・高さ四三<sub>センチ</sub>の円筒状を呈する。蓋は八角形の笠状の入り蓋式を呈し、裏側は凸状の加工によつて筒身と抱合する。観察の結果、体部外面・内面の加工及び底部の外・内面の加工痕が石鍋に類似することから、石鍋と同じ技術で製作された可能性が高いことが分かつた。筒身は非常に丁寧な作りとなつており、器高を縮めれば石鍋になるような雰囲気である。蓋は筒身に比べるとやや粗い作りとなる。笠の部分の頂点は中心に位置しておらず、若干のズレが生じている。蓋内側の凸部は筒身の直径に合致する大ききで加工されていることから、筒身と笠部の組み合わせは間違いないと考えられる。



写真7-2 箕島経塚出土経筒  
(大村市立史料館所蔵)

■七. 裏見の滝出土経筒(大村市重井田町 写真7-3)

裏見の滝の岩壁から出土している。付近に発見に関する記念碑があり、そこには昭和十一年(一九三六)に発見されたと記述されている。経筒の観察の結果、箕島の経筒と同様、筒身は石鍋の技術で作られた可能性が高い。高さは箕島のものに比べて短く、また、外面のノミの加工に若干の違いはあれ、総合的には同じ種類である。蓋は平蓋の被蓋式で装飾はない。表面に凸状の円が施される程度である。

■八. 三島山経筒(佐世保市広田町)

早岐瀬戸に位置する三島と呼ばれる小島から出土している。往時は標高一七メートル、周囲約三〇〇メートルの島であったが、近世の新田開発によって現在の陸続きの地形へと変貌を遂げた。発見の経緯は、昭和三十六年(一九六一)に頂上部の土砂が崩れたことにより経筒の蓋が露出、発見へとつながった。その後調査を実施したが、結果、土坑底に砂岩の台石と四点の遺物が確認された。また、粉末化状態の木炭が土坑内に認められたが、調査担当者は湿気防止のための処置と報告している。筒身は直径一九センチメートル、高さ三六センチメートルの大きさで筒形の形状を呈する。蓋は直径二六センチメートルで盛蓋の被蓋式である。時期は十一世紀に位置づけられており、末法思想に基づく遺構としている。島に位置する点では箕島経筒と共通している。

■九. 長野出土経筒(諫早市長野町)

出土地点は長野町と宗方町の間を流れる長野川の左岸(西側)で、ゴルフ場の一部を拡張工事する際の畑地掘削中に筒身一点と蓋二点が出土している。大きさは筒身の直径は二六〜二七センチメートル、高さは三〇センチメートルとなっている。筒身の外面四カ所に突起がみられるのが最大の特徴で、外観は縦耳型に類似するようにみえる。石鍋の製作技術を用いたと考えられる。蓋は四角形の笠状を呈し、形状は箕島のものに類似している。蓋は筒身に比べ作りがやや粗い。この点



写真7-3 裏見の滝出土経筒  
(大村市立史料館所蔵)

も箕島のものに類似している。

以上、大村湾を中心とした滑石製品をみてきたが滑石製経筒の分布は県内でも興味深い。これは生産地である西彼杵半島からの距離が比較的近いことが要因となっており、縦耳型の段階から大村湾を中心とする滑石製品の流通が想定される。石鍋四個で牛一頭の価値があったといわれており、石鍋を含む滑石製品は重要なものであったといえよう。特に滑石製経筒は末法思想に基づき製作されたもので、これが作られた時期は比較的短く、西北九州を中心に確認されている。縦耳型石鍋も西北九州を中心に確認されており、経筒の加工痕から石鍋の製作集団が製作した可能性は高い。

### ◆ 生産地から消費地へ

前項で消費地出土の滑石製品をみてきた。これらは生産地である西彼杵半島から素材が運ばれたことが分かる。では具体的にどこから運ばれてきたか。ここではこのことについて検討する。

生産地は図7-8のように半島の至る所に製作所跡が存在する。蛇紋岩の形成の際に滑石も生成されるので、蛇紋岩の存在を確認できれば滑石を周辺で見つけることができる。したがって、このような考えに基づくと滑石を利用する製作所跡の存在も確認できる。特に西海市西海町から西海市西彼町にかけて蛇紋岩の鉱床帯は集中するが、現在、これに合致する状態で下茅場巻頭写真・上大平・ツル掛第一・ツル掛第二写真7-1・松尾平巻頭写真の製作所跡が存在する。いずれも規模が大きく、また、大村湾に面した特徴ももつことから、この一帯から大村へ向けて搬出した可能性が高い。この大串・鳥加一带には先ほど述べた製作所跡と並んで綿打川・菰立川・鳥加川などの河川も存在し、山中で切り出した未製品を河川沿いに港まで運んだと思われる。未製品は生産地の観察から外面は仕上げ加工まで行っているが、内部加工の仕上げまでは行わず、搬出港あるいは消費地で仕上げ加工を行った可能性が高い。消費地で確認される石鍋の内部は内・外面ともに仕上げ加工が施されており、生産地の中は内部加工が荒削りで終わっている。このことから先述した石鍋の仕上げ加工が生産地の搬出港あるいは消費地で行われたことの結論づけができる。

生産地で船に積まれた石鍋は大村湾の西側を南下する海流によって湾の南側を通過、その後東側へ到達したと考えられる(図7-11・7-12)。現在、石鍋が確認されている遺跡はこの海流沿いに存在することが分かる(図7-9)。経筒出土遺跡は別として、石鍋出土地は縦耳型から鐔付型の初期段階、すなわち、十世紀～十三世紀に位置づけが可能である。この時期は西北九州の石鍋の時期に合致すると同時に、滑石製経筒の年代もこの範疇(はんちゆう)に合致する。経筒の筒身は石鍋の製作工程に大変類似しており、特に箕島経塚出土経筒や裏見の滝出土経筒の筒身は石鍋の製作技術を用いて製作されたと推定される。ただし、蓋に関しては、筒身と比べると若干、精巧さに欠けるところがあり、また雑さも感じる。このことから蓋は生産地からブロックで入荷し、消費地で加工したと考えられる。また、筒身と蓋は滑石の質が異なる。製作所跡の同地点で筒身と蓋を切り出して出荷すれば同質の経筒が完成するはずだが、筒身と蓋は消費地へ到着するタイミングが異なることが可能性の一つとしてあげられる。

西彼杵半島の西側にも生産地は存在する。特に神浦川・雪浦川・河通川・伊佐の浦川を基軸として製作所跡が点在し、いずれも縦耳型の時期に産出することが踏査で確認されている。ここから大村湾へ搬出できないこともないが、合理的に考えると西彼杵半島東岸から搬出した可能性が高く、西岸の水系(河川)に位置する製作所跡は別の場所へ搬出したと推定される。特に北上するルートには門前遺跡(佐世保市)・楼厩田遺跡(松浦市)等の縦耳型を出土した遺跡が存在し、このような遺跡は北部九州方面に向かう

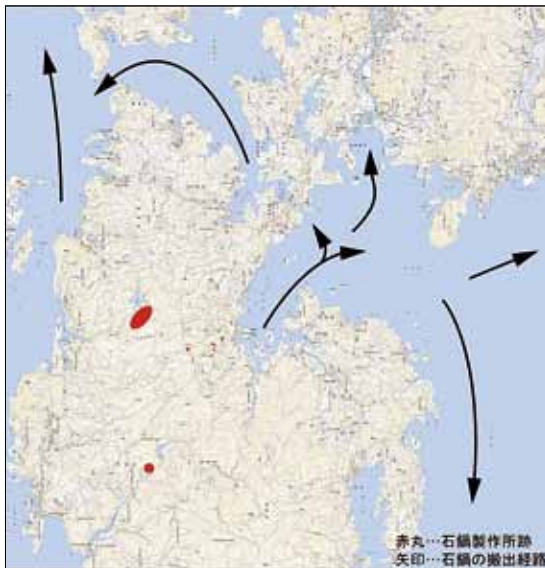


図7-11 大串方面からの石鍋搬出経路(石橋2007を修正)

ルートの中継地の可能性を提示してくれる。また、西岸から南下することによって、南九州方面へ、更には沖縄方面へのルートが開けてくる。このように西彼杵半島の東西で搬出するルートを述べてみたが、あくまでも可能性の一つとして提案するもので、西岸の製作所跡の未製品が東彼杵・大村方面へ搬出されたことも否定できない。ただし、製作所跡の規模や地理的な条件を考慮すると、東岸製作所跡から東彼杵・大村方面へ搬出したことは十分考えられる。

以上、石鍋製造と流通をみてきた。西彼町内の石塔に「海夫道浦」と刻まれたものが存在する。この銘から海夫と呼ばれる集団が海上交易に従事したことが推定され、石鍋も彼らの交易の一つであったと言える。このような集団は多く存在したと考えられ、地理的な観察から形上（長崎市琴海町）や村松（長崎市琴海町）にもそのような集団が存在したと考えられる。また、堂崎（西彼杵郡長与町）や伊木力（諫早市多良見町）・大草（諫早市多良見町）方面にも海夫の存在が推定され、大村湾の西側から南側にかけて海での生活を生業とした集団が存在したと考えられる。

大村湾を中心とした古代末から中世にかけての滑石製品に関する遺跡は、東に消費地、西に生産地を擁し、生産地から消費地への流通の経路が比較的分かりやすい地域であろう。しかし、製作所跡の年代や製作工程、石鍋の実年代、また経筒等の仏具関係など個々の問題は山積している。大村湾における滑石製品の研究の方向性として、先ほど述べた個々の問題を解決することが課題であろう。特に大村は箕島経筒に代表されるように完成度の高い経筒があるが、



図7-12 大村湾の潮流

滑石経は確認されていない。この問題は生産地を含めた考察が必要となるが、今後、このような問題に取り組み必要がある。

(東 貴之)

註

- (1) 副島は昭和四十六年(一九七二)に製作工程案を発表しているが、戦前の八重津・内山の案を参考にした可能性が高い。副島は桶状石鍋(A)と鐔付型芋石鍋(B・C)の製作工程について案を発表しているが、生産地でその未成品が確認できるものはCである。生産地における未成品の状況からAとBの形態は存在しない。ただし、滑石製の経筒に関しては副島分類のA、下川分類の桶状石鍋(図7-3上段)は製作工程が類似することが確認されている。
- (2) 糸山 淳作成による。
- (3) 石鍋製作所跡は図7-8以外でもたくさん存在する。ここでは踏査によって確認された石鍋製作所跡を紹介しているが、実際は多くの製作所跡の存在が推定される。
- (4) 「稲富裕和・橋本幸男他編『寿古遺跡』県営圃場整備事業福重地区にかかる遺跡発掘調査報告書(大村市文化財保護協会一九九二)

参考文献

- 網野善彦責任編集『海と列島文化』第四巻「東シナ海と西海文化」(小学館 一九九二)  
長崎県立美術館編『長崎県立美術館研究紀要』第2号(長崎県立美術館 一九七四)

## 第二節 大村における貿易陶磁の様相と意義

本節では、現在の太田市とその周囲を含むかつての彼杵郡における貿易陶磁、すなわち海外から輸入された陶磁器の出土状況を概観し、その搬入の背景や歴史的意義について述べる。

## ◆ 古代から中世前期

列島では縄文時代から土器の使用が始まり、弥生時代、古墳時代を経て歴史時代に至るまで連続と生産され、石器と並んで最も一般的に遺跡から出土する考古遺物である。その後、時代が下って平安時代になると、各地の遺跡では土器に加えて中国を中心に生産された陶磁器が出土するようになる。考古学では、こうした海外産の陶磁器のことを「貿易陶磁」と呼ぶ。中でも最初期の貿易陶磁は、平安時代前期（九世紀頃）に輸入されたもので、浙江省の越州窯一帯で生産された青磁（以下、越州窯系青磁）に代表される、いわゆる「初期貿易陶磁」である。初期貿易陶磁の全国的な出土分布の中心は福岡市の鴻臚館跡であり、続いて各地の官衙や寺院などの拠点的な場所を中心に出土する傾向がある。したがって、初期貿易陶磁が出土する遺跡については一般的な集落遺跡とは異なり、何らかの拠点的性格を考えていく必要がある。大村地域における初期貿易陶磁の出土状況は、かつては寿古遺跡で僅か二点の確認例があるにすぎなかったが①、近年、まとまった量の越州窯系青磁の出土が確認されている。

**竹松遺跡（大村市）** 竹松遺跡は、郡川左岸の竹松町に広がる縄文時代から中世にかけての遺跡で、九州新幹線長崎ルートの工事に伴う発掘調査で、古代の遺物がまとまって出土しており、越州窯系青磁約百点が確認されている②。竹松遺跡は、彼杵郡における古代官道の想定経路上にあり③、北方に比定される彼杵郡家との関連も指摘され、今後の出土状況が注目される。

平安時代後期（十一世紀後半～十二世紀）になると、貿易陶磁は、中国南部で生産された白磁や、それに続いて福建省の同安窯系青磁や浙江省の龍泉窯系青磁が主体となってくる。大村湾沿岸の白井川遺跡、寿古遺跡などの遺跡で、この時期のまとまった量の貿易陶磁の出土が確認されている。

**白井川遺跡（東彼杵町）** 白井川遺跡は、大村湾の北東岸、彼杵川河口部に所在する遺跡で、発掘調査によって中世の遺物がまとまって出土している④。遺物全体の六割を貿易陶磁が占め、その主体は中国南部産の白磁、同安窯系青磁、龍泉窯系青磁であり、白磁には「個」銘の墨書陶磁器が含まれている。国産の遺物としては瓦器碗

があり、畿内産の楠葉型瓦器碗(後述)が含まれている(5)。更に、対岸の西彼杵半島で生産され、全国的に流通していた滑石製石鍋も出土している。北西側に隣接する岡遺跡でも、白井川遺跡に比して四割程度とやや低いが、同傾向の貿易陶磁がまとまって出土している。

**寿古遺跡(大村市)** 郡川河口の右岸に所在する遺跡で、城館跡として別に遺跡となっている好武城跡を中心に広がっている。白井川遺跡と同傾向の貿易陶磁が出土している(6)。

これらの発掘成果から、大村湾岸では河口部の遺跡を中心に中世前期の貿易陶磁が一定量出土していることが分かる。一方、中世において国内で貿易陶磁が最も多く出土する場所は博多(現在の博多駅から呉服町方面へ広がる博多遺跡群)であり、海外からの貿易船の主たる目的地であったことが考古学的に明らかにされている(7)。博多遺跡群における出土遺物からは、博多に居を構えて故国との貿易を行った「博多綱首」と呼ばれる宋商人の存在がうかがえるという。具体的には、貿易陶磁の底部に中国人名、「綱」の文字、数量などを記した墨書陶磁器がある。これらは、宋商人のリーダーに率いられた「綱」、すなわち貿易グループの積荷であることを示したものであり、中国で船積み際に際して記されたものと考えられている。更に博多遺跡群では、中国の窯で生産時に熔着したままの陶磁器や、窯道具が貼り付いた陶磁器が出土する例がある。これらの存在からは、中国から船積みされて博多で荷揚げされた後の、商品としての選別の過程がうかがえるという(8)。大庭康時は、このような博多遺跡群の特色を踏まえ、大村湾沿岸に所在する白井川遺跡の貿易陶磁に「綱」銘の墨書陶磁器が含まれていることに着目し、「白井川遺跡付近においては、しばしば宋船が立ち寄り交易が行われた」と指摘している(9)。一方、同遺跡で出土している貿易陶磁の数量が博多と比較して圧倒的に少なく、特に貿易品を貯蔵・運搬した壺・甕などの容器が極めて少ないことから、「しかしそれは、積み荷の一部をおろす程度に留まっていた」と推測している。墨書陶磁器あるいは熔着資料の出土は、東シナ海沿岸では、長崎半島の長崎市深堀遺跡、五島列島の小値賀町前方湾海底遺跡や福江市大浜遺跡、更に熊本県天草市浜崎遺跡や鹿児島県南さつま市持鉢松遺跡などで、有明海沿岸では、島原半島の雲仙市伊古遺跡、佐賀市蓮池上天神遺



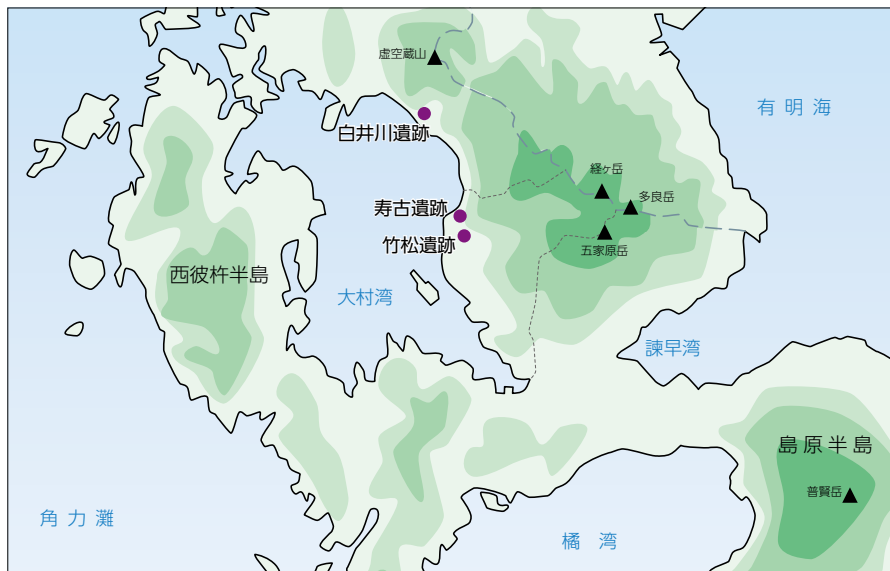


図7-13 関連遺跡位置図 (大村湾岸地域)



写真7-4 竹松遺跡出土越州窯系青磁

(長崎県教育庁新幹線文化財調査事務所提供)

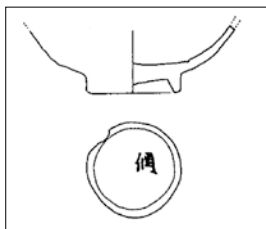


図7-14 白井川遺跡出土「個」銘墨書陶磁 (1/5)

(東彼杵町教育委員会 東彼杵町文化財調査報告書第3集より)



図7-15 白井川遺跡出土楠葉型瓦器碗 (1/5)

(森 隆「中世土器の生産にみる地域型の提唱と工人集団の系譜について」より)



写真7-5 寿古遺跡出土貿易陶磁

(大村市教育委員会所蔵)

跡、玄界灘沿岸では松浦市楼階田遺跡や壱岐市興触遺跡などでも確認されており、博多湾以西の九州西岸と島嶼部とうしよでは、宋船の寄港に伴う小規模な交易が行われていたことが、考古学的に明らかになりつつある。

更に、これらの遺跡の多くからは、楠葉型瓦器碗が出土していることも注目されている。楠葉型瓦器碗は、摂関家領であった河内国楠葉牧で生産された瓦器碗で、その分布は古代官道沿いや物資集散地、瀬戸内海航路周辺など交通の要衝に限られ、商品というよりは、国家が交通輸送を掌握していた古代的な運送形態を間接的に示す物証と考えられている<sup>⑩</sup>。白井川遺跡の所在する彼杵庄は九条家領であり、白井川遺跡付近で九条家も絡んだ小規模交易が行われた可能性も指摘されている<sup>⑪</sup>。またこの時期、対岸の西彼杵半島において滑石製石鍋が生産され、全国的に供給していた状況との関連もうかがえる。

中世前期の対外交渉に関しては、森 克己が大著『日宋貿易の研究』において、日宋貿易が厳しい貿易統制の中で「鎖国的」に推移する中で、貴族・寺社などの荘園領主と宋海商が結びついて「荘園内密貿易」が盛行したとしていた<sup>⑫</sup>。白井川遺跡や持鉢松遺跡の発掘成果は、一見すると森の指摘を実証するようにもみえるが、近年では山内晋次などの文献史の研究者から「すくなくとも十二世紀半ば頃までは政府の貿易管理が有効に機能し、十一世紀に森がいうような荘園内密貿易が行われたとは考えにくい」とするなどの批判が行われている<sup>⑬</sup>。考古学の大庭康時も、前述のとおり白井川遺跡付近への宋船の寄港は認めつつ、博多遺跡群と比較して取引は極めて限定的であることから、「密貿易の盛行」については支持せず、山内の見解を支持している<sup>⑭</sup>。山内・大庭の指摘は森説への否定的見解であり、密貿易への消極的評価である。このような学説的議論から距離を置くとすれば、大村湾で出土する中世前期の貿易陶磁は、博多へ向かう宋船が大村湾へ入り、沿岸において九条摂関家も関わった小規模な交易が行われていた可能性を示す物証であると、積極的に評価することができよう。

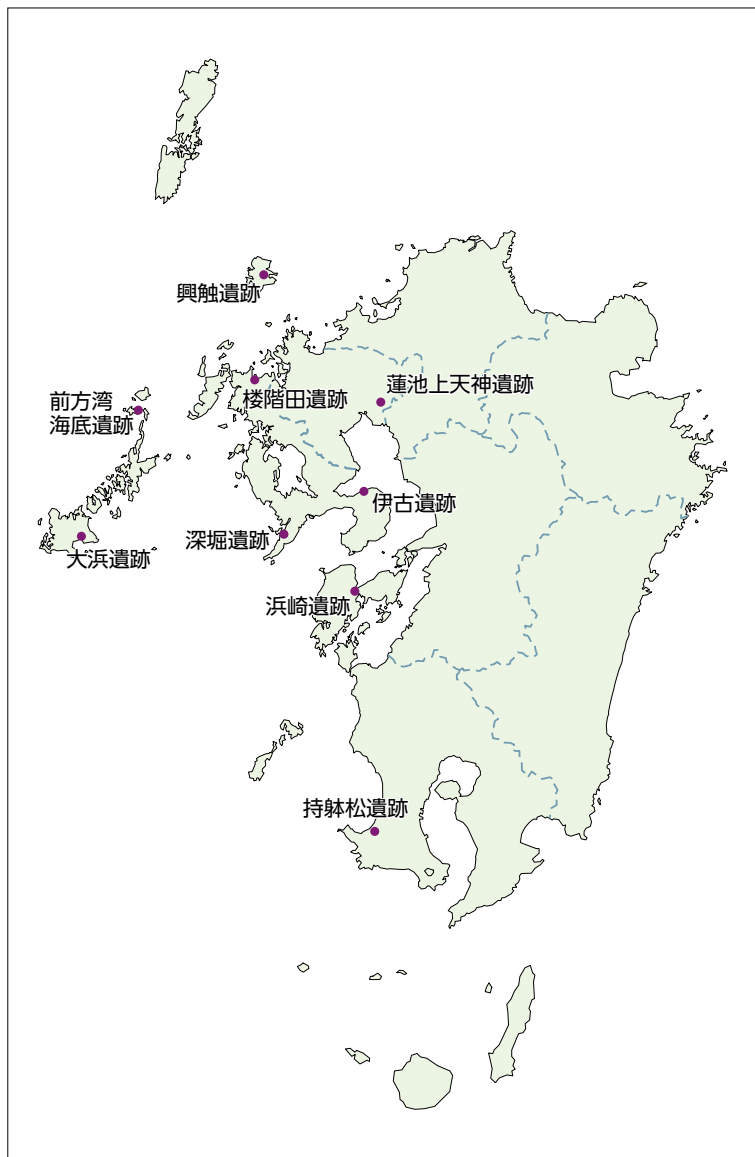


図7-16 中世前期の関連遺跡 (大村湾岸以外の地域)

中世後期(十四世紀から十五世紀)にかけては、大村湾沿岸の遺跡における中国陶磁の出土量は減少する<sup>15)</sup>。その一方で、数量的には少ないものの、それまでにはみられなかった産地の貿易陶磁が出土するようになる。これらを概

観し、その流入の背景について考えてみたい。

**小園城跡（東彼杵町）** 小園城跡は、現在の太田湾パークキングエリア付近に位置し、高速道路の建設に先立って発掘調査が行われた<sup>16</sup>。空堀が検出され、中世後期の中国産白磁や白地鉄絵壺、土師器や石鍋が出土している。雲龍文を描いた白地鉄絵壺は、河北省の磁州窯系の製品であり、県内では壱岐市の観城跡や南島原市の日野江城跡など限られた遺跡で出土しているにすぎない。太田湾沿岸と中国北方との関わりを示す資料である。

**城の尾城跡（大村市）** 大村市城の尾城は、大村市東大村二丁目に所在する尾根を利用した山城で、城郭プランや採集された遺物の年代から南北朝から室町時代にかけての城跡と考えられている<sup>17</sup>。採集された遺物には、タイ産の黒褐釉四耳壺の破片が含まれている。タイ産の黒褐釉四耳壺の海外への輸出は、十四世紀後半頃から始まるとされる<sup>18</sup>。列島における東南アジア陶磁の出土は、十四世紀の後半から十五世紀の初頭にかけての対馬・水崎仮宿遺跡や壱岐の観城跡での出土が知られるが、これらは碗や皿などがほとんどで、運搬・貯蔵に用いた壺などは出土していない。壺類が確認される初期の資料は、鹿児島神宮伝世のタイ産の灰釉印花象文壺が十四世紀代に遡る可能性があるものの<sup>19</sup>、まとまったものとしては十五世紀中頃に位置づけられる沖繩の首里城・京ノ内一括資料である<sup>20</sup>。長崎県内では、有馬氏の居城である南島原市の日野江城跡本丸地区曲輪3から黒褐釉壺が出土している<sup>21</sup>。同資料の年代下限は、その他の遺物の出土状況から十六世紀中葉と考えられる<sup>22</sup>。城の尾城跡出土のタイ産黒褐釉四耳壺の年代は、これらを参考とすれば、十五世紀から十六世紀前半にかけてと推測されよう。

**黒丸遺跡（大村市）** 黒丸遺跡は、郡川河口左岸に所在し、縄文時代から近世に至る広大な遺跡である。貿易陶磁を含む中世の遺物も若干確認されているが、韓国産の青磁象嵌菊花文鉢が採集されており<sup>23</sup>、全羅南道の道里浦の引き揚げ資料から十四世紀後半に位置づけられる<sup>24</sup>。歴史背景を踏まえれば、前期倭寇が活発であった時期に相当し、直接・間接に大村地域が朝鮮半島と関わった可能性を示している。中世後期における大村と朝鮮半島の関わりを示す史料としては、やや時代の下る一四七一年に申叔舟が進撰した『海東諸国紀』がある<sup>25</sup>。この

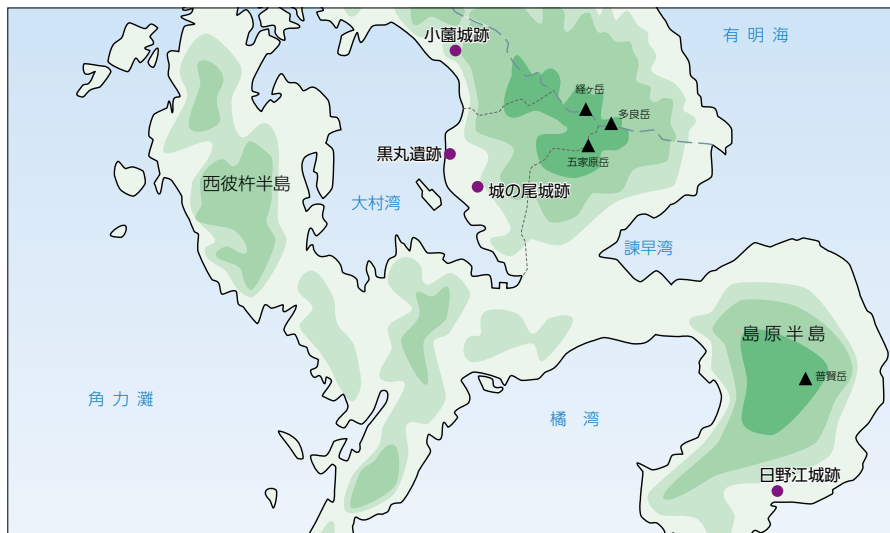


図7-17 中世後期の関連遺跡位置図

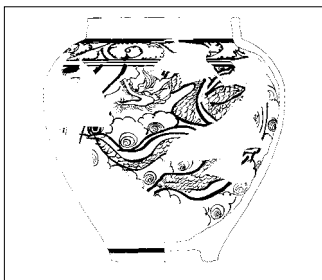


図7-18 小園城跡出土磁州窯系陶器 (1/8)

(長崎県教育委員会 長崎県文化財調査報告書第99集より)



写真7-6 城の尾城跡出土タイ陶磁

(長崎県埋蔵文化財センター所蔵)



写真7-7 黒丸遺跡採集韓国陶磁

(大村市教育委員会所蔵)

中で彼杵から朝鮮への通交者として「清男」が、大村からの通交者として「源重俊」がみえる。清男については、「己丑年、遣使来朝す。書に、肥前州彼杵郡彼杵遠江清原朝臣清男と称す。宗貞国の請を以て接待す」とあり、源重俊については、「丁亥年、遣使して来り、舍利の分身を賀す。書に、肥前州太村源重俊と称す。太村に居す。武才を能くす。麾下の兵有り」とある。己丑年は一四六九年、丁亥年は一四六七年と考えられ、記述をみる限り、この頃に大村湾から朝鮮へ使者が派遣されていたことになる。しかし、近年の研究では、これらの通交者は対馬島主宗氏が仕立てた「偽使」である可能性が指摘されている<sup>26</sup>。大村では、朝鮮産と考えられる陶磁器が貿易陶磁中一割台の割合で確認できるが<sup>27</sup>、これらが大村における「偽使問題」の解決に一定の方向性を与えるのかどうか、今後の出土状況が注視される。

中世後期の貿易陶磁が減少する背景について宮崎貴夫は、「統制貿易によって在地領主の密貿易が困難になったことがあげられるが、明の海禁政策により中国商人の動きが抑制されたのも大きな要因ではなかったのかと思われる」と推測しているが<sup>28</sup>、散発的ながら大村湾沿岸で多様な産地の貿易陶磁が出土していることは、中国船の寄港が途絶した後も、この地域が中国・朝鮮・東南アジアなど広範な世界と直接・間接に関わったことを示しているといえよう。

### 三 中世末期

十六世紀は、貿易陶磁の種類・量ともに再び増加する時期であり<sup>29</sup>、文献からみると大村氏の活動が具体的に明らかになる時期でもある。一般的な時代認識としては戦国時代に相当するが、本節では中世後期と区別して中世末期とした。内容的には、大村氏が十六世紀末に築城した玖島城の初期の段階までを扱う。

大村氏に関連するこの時期の城館・遺跡としては、今富城跡、三城城跡及びその城下である三城城下跡、大村純忠晩年の居館である坂口館跡、そして玖島城跡がある。これらの城館遺跡に共通して出土する貿易陶磁は、中国の景德鎮産（あるいは漳州窯産）の青花であるが、加えて今富城を除く遺跡からは全国的には珍しい中国南部で生産された

華南三彩やタイ産の焼締四耳壺が出土している。華南三彩とは、黄色・緑・青・紫などの釉をかけた陶器質あるいは半磁器質の三彩で、壺・水注・盤・合子ごうしなど様々な器種がある。よく知られているのは、三彩貼花牡丹文有耳壺で、イギリスの著名な収集コレクションにちなみ、「トラデイスカント・ジャー」と呼ばれている。華南三彩やタイ産の焼締四耳壺は、上記の大村市内の遺跡に加えて長崎を含む、かつての大村領内を中心とした九州西岸及び東岸の豊後府内などで出土している。その概要は以下のとおりである。

**三城城下跡(大村市)** 大村純忠が居城とした三城城に隣接する城下町である。朝長伊勢守屋敷跡の調査でタイ産の焼締壺が一点出土している<sup>30)</sup>。

**坂口館跡(大村市)** 天正十五年(一五八七)年に死去した大村純忠が晩年の二年ほどを過ごした場所である(市指定史跡)。歴史公園整備に先立つ発掘調査で建物跡が中心に検出されているが、館としての全容は分かっていない。華南三彩壺(トラデイスカント・ジャー)が複数個体、タイ産の焼締壺の破片数点が出土している<sup>31)</sup>。

**玖島城跡(大村市)** 三城城に替えて大村氏が慶長四年(一五九九)に拠点とした城館であり、市と県により一部の発掘調査が行われている。城の東側堀外に位置する桜田屋敷跡の発掘調査で、華南三彩の壺(トラデイスカント・ジャー)<sup>巻頭写真</sup>・盤・小皿・水注それぞれ一個体と、十数点の破片が出土している<sup>32)</sup>。

**針尾城跡(佐世保市)** 対岸西彼杵半島北端に位置する横瀬浦で奉行をつとめた針尾伊賀守の城館である。フロイスの『日本史』(第一部四八章)には、一五六三年の横瀬浦における宣教師襲撃事件に針尾氏が関与した記述がある。「そこで彼らは、自分たちの陰謀を成就するために、これまた大村の家臣で針尾という殿と結託した。この殿は、大村湾の海水が極めて激しい潮流となつて入つて来るある海峡に城を構えていた」とあり<sup>33)</sup>、この城が針尾城に比定される。針尾氏は、この事件の後に純忠に追放されるが、息子たちは引き続き純忠に仕えて針尾を拠点としたものの、天正元年(一五七三)の松浦氏の侵攻で針尾を失った。したがって、針尾城の年代下限は宣教師襲撃事件後の一五六三年か、松浦氏の針尾侵攻の一五七三年を想定できる。発掘調査によって、タイ産の褐釉四耳

壺と華南三彩の鳥形水注が出土している(34)。

**長崎遺跡群(長崎市)** 長崎湾に突き出た岬の上に、大村純忠によって元亀二年(一五七二)に町建てされ、以後、南蛮船・唐船・朱印船・オランダ船などによる貿易の集中と共に発展した港市遺跡である。地域の各所で調査が行われており、タイ産四耳壺、華南三彩ともに相当量が出土している。一例をあげると、最初に町建てされた六町のひとつ大村町の調査では、タイ産の焼締壺が二個体以上、華南三彩の壺・盤・水注がそれぞれ数点出土している(35)。

**豊後府内(大分市)** 大友氏の城下町であり、大友氏の居館である大友館跡(国史跡)とその城下町である中世大友城下町遺跡からなる。近年、著しく調査が進展し、街区をはじめとする中世都市の様相が明らかになったほか、国際色豊かな遺物が出土して注目されている。とりわけ、城下で広域に確認されている天正十四年(一五八六)の鳥津氏の府内侵攻に伴うと考えられる焼土層からは、タイ産の焼締と華南三彩が数多く出土している。このような文献上の年代観と出土遺物の様相を踏まえ、豊後府内から出土する東南アジア陶磁を南蛮貿易の所産とする指摘がある(36)。

出土地の性格を考えると、これらの遺跡はいわゆる「キリシタン大名」の関係地であり、領内に南蛮船が入港している点で共通している。九州における南蛮船の入港地の変遷については、岡本良知の研究からうかがうことができる(37)。それによれば、一五四〇年代から一五六〇年前後までは、九州南岸の鹿児島や東岸の豊後、西岸の平戸などに入港していたが、一五六〇年代後半以降は、大村氏・有馬氏の領内や天草など九州西岸に集中するようになる。タイ産の焼締四耳壺と華南三彩の出土は、南蛮船の寄港地と同様の分布状況を示しており、これらが南蛮船によって運ばれた可能性は高いものと考えられる。ただし、豊後府内における出土については、南蛮船が直接入港した時期(一五五〇年代)と出土した遺物の年代下限(一五八六年)に三〇年ほどの隔たりがある。これらの豊富な出土量から考えれば、入港時からの伝世に加えて、入港が途絶えた後も九州西岸を通じてこれらを積極的に入手していた可能性が高い。また、玖島城跡出土の華南三彩についても、大村氏がイエズス会に寄進した長崎が秀吉によって没収され、



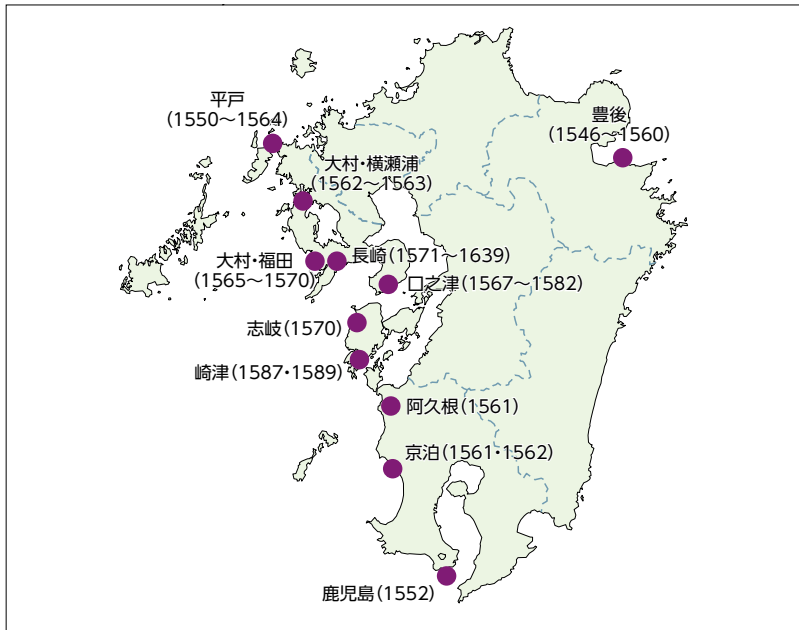


図7-19 南蛮船寄港位置図



図7-20 関連遺跡位置図

大村氏が海外貿易の窓口を失った後に相当し、南蛮貿易への優先的な関与は難しかった時期と推測される。これを裏付けるように、玖島城からタイ産の四耳壺は出土していない。華南三彩は貴重品として、三城城からの移転に伴って運ばれたものと推測される。

**三城城と玖島城の貿易陶磁** 新旧の大村氏の城跡に焦点を絞り、その他の注目される貿易陶磁を概観し、意義を述べてみたい。『大村記』によれば三城城は、永禄七年（一五六四）から慶長四年（一五九九）にかけて、純忠・喜前の居城であったとされる<sup>38</sup>。発掘調査によつて堀や建物跡が確認され、十五・十六世紀を主体とする遺物が出土している<sup>39</sup>。貿易陶磁としては、龍泉窯系青磁、景德鎮系青花、漳州窯系青花のほかに、福建省の徳化窯系白磁の玉取獅置物が出土している<sup>40</sup>。上部を欠いているが、出土例は少ない。国産の土器や陶磁器としては、土師皿や絵唐津を含む肥前陶器がある。更に、国産の瓦と共に朝鮮産の瓦も出土しており<sup>41</sup>、大村氏の朝鮮出兵（文禄の役）との関連も推測される。

玖島城は、大村氏が三城城に替えて慶長四年（一五九九）に居城とした城館である<sup>42</sup>。玖島城跡の東側堀外の発掘調査では、江戸初期の建物跡や造成で埋められた石垣が確認され<sup>43</sup>、『大村家記』巻之七の「古館在久嶋城長追手堀外 純信幼少ノ時暫ク爰ニ居ス今静寿園ト云フ」にみえる「古館」との関連や、『見聞集』巻之二の「御城大手最初ハ山里の方なり慶長十九年寅年改築かるゝの時本小路口大手と成と云々」にみえる、慶長十九年（一六一四）の大手の付け替えに伴う一連の土地改変との関連が指摘される。そして、これらの遺構に伴って多数の貿易陶磁が出土している。前述の華南三彩のほか、注目されるものとしては、中国・景德鎮系の青花・色絵、漳州窯系の青花、アルパレロ形マヨリカ陶器がある。日本では「芙蓉手様式」と呼ばれる景德鎮系青花のカラック・ウエアは、平戸和蘭商館の一六一六年造成石垣や<sup>44</sup>、セント・ヘレナ島沖で一六一三年に沈没したオランダ船、ヴィッテ・レーウ号の引き揚げ資料<sup>45</sup>に類例がある。更に、玖島城出土のカラック・ウエアに含まれる青花蓮弁文の小杯は<sup>46</sup>、十七世紀のオランダの画家クリストフェル・ファン・デン・ベルヘが一六一七年に描いた作品「花束」（アメリカ合衆国 フィラデルフィア美術館所蔵）の中に同じタイプのものが描かれており、この頃、西洋を中心に愛好されていたものであることが分かる。

景德鎮系色絵は、高台内に「天啓年製」銘のある、いわゆる「天啓赤絵」である(47)。天啓は、明末の年号(一六二一—二七)であり、製作年代が判明するとともに、瀟洒しょうしやうな作品として茶席などでの使用が考えられるよう。漳州窯系の青花や赤絵は、厚手の陶質磁器で、日本では「呉須手」や「呉須赤絵」として親しまれ、茶席でも菓子鉢として用いられることもあった。玖島城では、肥前陶器(絵唐津)と共に出土している(48)。

アルバレロ形のマヨリカ陶器(マジヨリカ陶器)は(49)、茶の湯では「阿蘭陀水差」として用いられ、大坂城出土のマヨリカ陶器が知られる(50)。玖島城出土のものもこれらと同形であり、出土状況から十七世紀初頭前後の時期が考えられ、我が国でも最も古期の出土例として注目される(51)。この種のアルバレロ形のマヨリカ陶器が、ヨーロッパのどこで生産されていたのか現状では明らかではないが(52)、かつて領内に南蛮船が入港していた経緯から海外事情に通じた大村氏が、長崎の南蛮船や、平戸のオランダ船を通じて、いち早く入手していた可能性がある。

三城城と玖島城の貿易陶磁を概観したが、前者は同時期の中世城館と比較して、一般的と言える状況であるのに対し、後者は希少性の高いものが多く含まれている。中でも華南三彩は、一五八六年に焼けた豊後府内の例を参考とすれば、本来は三城城が機能していた時期にもたらされていた可能性が高く、前述のように玖島城移転の際に運ばれたものと推測される。玖島城出土の貿易陶磁は、三城城伝世品と十七世紀初頭に輸入されたものから構成されていると指摘することができよう。

大村における古代から中世末にかけての貿易陶磁を概観したが、東アジアから東南アジア、そして西洋に至る幅広い産地の貿易陶磁が出土していることが分かる。貿易陶磁の様相は、文献史学が提示する政治・経済の動きを直接反映するものではないが、各地の出土状況と比較することで、地域と世界の関わりを示す指標のひとつとなる。こうした観点に立てば、大村における貿易陶磁のあり方は、連続と続く海外との関係を物語っており、この地域が海を媒介とした開放性を基層としていることを示しているといえよう。

(川口洋平)



写真7-8 坂口館跡出土タイ陶磁 (大村市教育委員会所蔵)



写真7-9 針尾城跡出土タイ陶磁 (佐世保市教育委員会所蔵)

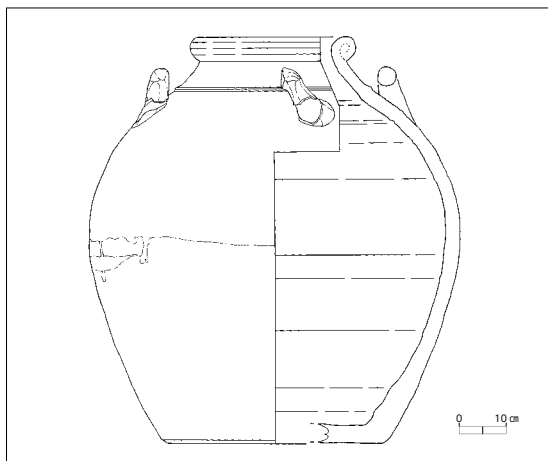


図7-21 針尾城跡出土タイ陶磁 (佐世保市教育委員会提供)

## 註

- (1) 宮崎貴夫「長崎県における貿易陶磁研究の現状と課題」(長崎県考古学会編『長崎県の考古学』長崎県考古学会 一九九四) 八六頁
- (2) 二〇一一年度から始まった長崎県教育委員会による新幹線関連の発掘調査成果
- (3) 木本雅康「古代国家の下に」(外山幹夫責任編集『図説長崎県の歴史』河出書房新社 一九九六) 六〇頁
- (4) 東彼杵町教育委員会編『白井川遺跡』東彼杵町文化財調査報告書第3集 (東彼杵町教育委員会 一九八九)
- (5) 森 隆「中世土器の生産にみる地域型の提唱と工人集団の系譜について」(日本中世土器研究会編『中近世土器の基礎研究VIII』日本中世土器研究会 一九九二) 二二二～二三頁
- (6) 大村市文化財保護協会編『寿古遺跡』(大村市文化財保護協会 一九九二)
- (7) 大庭康時ほか編『中世都市・博多を掘る』(海鳥社 二〇〇八)
- (8) 大庭康時「博多」橋本久和・市村高男編『中世西日本の流通と交通』高志書院 二〇〇四
- (9) 大庭康時「博多綱首殺人事件」博多研究会編『博多遺跡群研究会誌』第3号 一九九四) 二二三頁
- (10) 橋本久和「中世土器研究序論」(真陽社 一九九二) 三三二頁
- (11) 前掲註(9) 二二三頁
- (12) 森 克己「日宋貿易の研究」(国立書院 一九四八)
- (13) 山内晋次「日宋貿易の展開」(加藤友康編『撰関政治と王朝文化』日本の時代史(6) (吉川弘文館 二〇〇二) 二六四頁
- (14) 前掲註(9) 二四頁
- (15) 前掲註(1) 九三～九四頁
- (16) 長崎県教育委員会編『九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書』VIII『長崎県文化財調査報告書第99集』(長崎県教育委員会 一九九一)
- (17) 長崎県教育委員会編『長崎県中近世城館分布調査報告書II詳説編』長崎県文化財調査報告書第207集 (長崎県教育委員会 二〇一一)
- (18) 向井 互「タイ産コンテナ陶磁器の海外搬出様相」(日本貿易陶磁研究会編『貿易陶磁研究』No.32 日本貿易陶磁研究会 二〇一二) 一一四～一一五頁



写真7-10 玖島城跡で検出された建物跡

(長崎県埋蔵文化財センター提供)



写真7-11 玖島城跡で検出された石垣

(長崎県埋蔵文化財センター提供)



写真7-12 三城城跡出土徳化窯系白磁  
(大村市教育委員会所蔵)



写真7-14 玖島城跡出土景徳鎮系青花小杯  
(長崎県埋蔵文化財センター所蔵)



写真7-13 三城城跡出土朝鮮系瓦  
(大村市教育委員会所蔵)



写真7-15 ベルへの「花束」  
(アメリカ合衆国 フィラデルフィア美術館所蔵)



写真7-16 ベルへの「花束」拡大写真

- 19 重久淳「沖繩から出土したタイ、ベトナム陶磁」(東南アジア考古学会シンポジウム資料「陶磁器が語る交流―九州・沖縄から出土した東南アジア陶磁―」 東南アジア考古学会 二〇〇四) 四九頁
- 20 金武正紀「沖繩から出土したタイ、ベトナム陶磁」(東南アジア考古学会シンポジウム資料「陶磁器が語る交流―九州・沖縄から出土した東南アジア陶磁―」 東南アジア考古学会 二〇〇四) 七〇～七二頁
- 21 川口洋平・中山 圭「九州西岸における東南アジア陶磁と華南三彩」(日本貿易陶磁研究会編『貿易陶磁』No.32 日本貿易陶磁研究会 二〇一〇) 七八頁
- 22 南島原市教育委員会編『日野江城跡 総集編Ⅰ』南島原市文化財調査報告書第6集 (南島原市教育委員会 二〇一〇) 九七頁
- 23 稲富裕和敬示。この資料の写真は、長崎街道シンポジウム等実行委員会編『長崎街道大村路』(長崎街道シンポジウム等実行委員会 一九九八) 四八頁
- 24 上田秀夫「道里浦」(国立歴史民俗博物館編『東アジア中世海道 海商・港・沈没船』図録 毎日新聞社 二〇〇五)、なお同定にあたっては、東京藝術大学の片山まび准教授にご協力をいただいた。
- 25 田中建夫訳註『海東諸国記』(岩波文庫 一九九一)
- 26 佐伯弘次ほか編『海東諸国記』日本人通行者の個別的検討」(九州大学21世紀COEプログラム(人文科学)東アジアと日本：交流と変容編『東アジアと日本』交流と変容』第3号 二〇〇六) 一〇三頁(松尾弘毅)
- 27 前掲註(1) 八五頁
- 28 前掲註(1) 九三頁
- 29 前掲註(1) 九四頁
- 30 大村市教育委員会編『市内遺跡発掘調査概報1』(大村市教育委員会 二〇〇七)
- 31 大村市教育委員会編『坂口館』(大村市教育委員会 一九九八)
- 32 長崎県教育委員会編『玖島城館』長崎県文化財調査報告書第167集 (長崎県教育委員会 二〇〇二)
- 33 松田毅一・川崎桃太訳『完訳フロイス日本史』9 (中央文庫 二〇〇〇) 九一頁
- 34 佐世保市教育委員会編『針尾城跡』(佐世保市教育委員会 二〇〇五)
- 35 長崎県教育委員会編『万才町遺跡』長崎県文化財調査報告書第123集 (長崎県教育委員会 一九九五) 及び川口洋平「大村町の変遷と歴史的意義」(西海考古同人会編『西海考古』第6号 西海考古同人会 二〇〇五)で追加報告。





写真7-17

玖島城跡出土天啓赤絵表



写真7-18

玖島城跡出土天啓赤絵裏

(長崎県埋蔵文化財センター所蔵)



写真7-19 玖島城跡出土マヨリカ陶器

(長崎県埋蔵文化財センター所蔵)



写真7-20 大坂城跡出土マジョリカ陶器

(公益財団法人 大阪市博物館協会  
大阪文化財研究所所蔵)

④③③③③③

坪根伸也「東南アジア陶磁器と豊後府内」(大分市歴史資料館編『豊後府内 南蛮の彩り〜南蛮の貿易陶磁器〜』大分市歴史資料館 二〇〇三)

岡本良知「十六世紀日欧交通史の研究」(六甲書房 一九四二)

大村市立史料館所蔵 史料館史料(請求番号)一〇一一〇「大村記」巻一

大村市教育委員会「三城城跡範囲確認調査報告書」大村市文化財調査報告書第29集 (大村市教育委員会 二〇〇五)

前掲註(38) 二七頁

- 前掲註(38) 四二頁。なお、朝鮮瓦は、玖島城でも出土している。
- (42) 大村市立史料館所蔵 史料館史料(請求番号)二〇一一「大村家記」一、二、藤野 保編『大村郷村記』第一卷(国書刊行会一九八二)、藤野 保・清水紘一編『大村見聞集』(高科書店 一九九四)  
前掲註(32)
- (43) 平戸市教育委員会編『平戸和蘭商館跡Ⅷ』平戸市の文化財50 (平戸市教育委員会 二〇〇三)  
RUKS MUSEUM THE CERAMIC LOAD OF THE WITTE LEEUW(1613) (一九八1)  
前掲註(32) 一一頁
- (46) 前掲註(32) 二九頁
- (47) 前掲註(32) 三五頁
- (48) 前掲註(32) 六三頁
- (49) 大阪市文化財協会編『大坂城Ⅶ』(大阪市文化財協会 二〇〇三)
- (50) 川口洋平「大村・玖島城出土のオランダ陶器」『考古学ジャーナル』462 (ニュー・サイエンス社 二〇〇〇)
- (51) 松本啓子「江戸時代鎖国前後の日本と海外諸国との交易についての考古学研究」『平成十五〜平成十八年度科学研究費補助金基礎研究(C)研究成果報告書 (二〇〇七)』

### 第三節 大村市周辺における中世城館

これまで確認されている長崎県の城館の数は約六〇〇カ所①を数え、約二割の一五カ所が県央地区(大村市・諫早市・東彼杵郡)に分布する。そのうち、大村市及び東彼杵郡に分布するものは大村氏に関連づけられて伝わる城館が多いが、元和元年(一六一五)の一国一城令によって、大名の居城以外は原則廃城を余儀なくされ、時と共に埋もれていき、今では樹木生い茂る丘や山に返り、城主や存在時期ばかりか名称さえ伝わっていないものがほとんどである。中世に大小の城館を結びつけた防衛網を維持することによって領地を守っていた大名たちは、それを失い、軍

事的に丸裸同然に至ったのである。

ともあれ、六〇〇もの城館が残されたのはこうした理由があったためであり、この忘れ去られた大小の城館は、廃城と同時に城館としての変化を留めている。今私たちが山中に分け入って目にする姿から、中世ないし近世初頭における様子を読み取ることは可能であり、城館が所在する小さな地域の、権力の在り方や危機の程度など、まさに地域の歴史を伝える貴重な文化財なのである。

ただ、紙面の限られるなかで、それらを網羅的に記述するには、長崎県内における城館研究がそれほど深まってはいないことや、大村藩領に相当する広い範囲でのデータの蓄積が十分でないことから難しいため、大村市及び東彼杵郡を中心とする若干の城館を通して、当地域における中世城館の実相を伝えることにしたい。

## 一 城館の分布

長崎県の地形は半島や離島が多く、あいだに海を介しているため、強大な勢力を有する大名が成立することを困難なものにした。また、平野が少なく山がちな地形であるため、一つひとつの城館の規模は小規模であり、その城域も不明確もしくはごく限られたものが多い。言い換えれば、これが長崎県の城館の特色であり、小規模領主の存在、もしくは複数の小規模な城館により地域支配を行った様子をうかがうことができる。

大村市周辺部においては、主に中小規模河川の下流域に城館の分布を見ることができるといえる。

大村市の中で最も大きな河川である郡川流域では、その下流域右岸に、好武城、今富城などの中世大村氏に關係すると伝わる城が分布しており、大上戸川中流域とともにもう一つの中心域といえる。郡川左岸に位置する竹松遺跡においては、中世の掘立柱建物跡<sup>(2)</sup>や堀、多数の中世陶磁器が確認されており、郡川下流域の一角が当時から栄えていたことを裏付けている。

諫早市との市境部分である鈴田川流域では、河川を挟んだ低丘陵上に塔之峰城、岸高城などの城館が立地している。

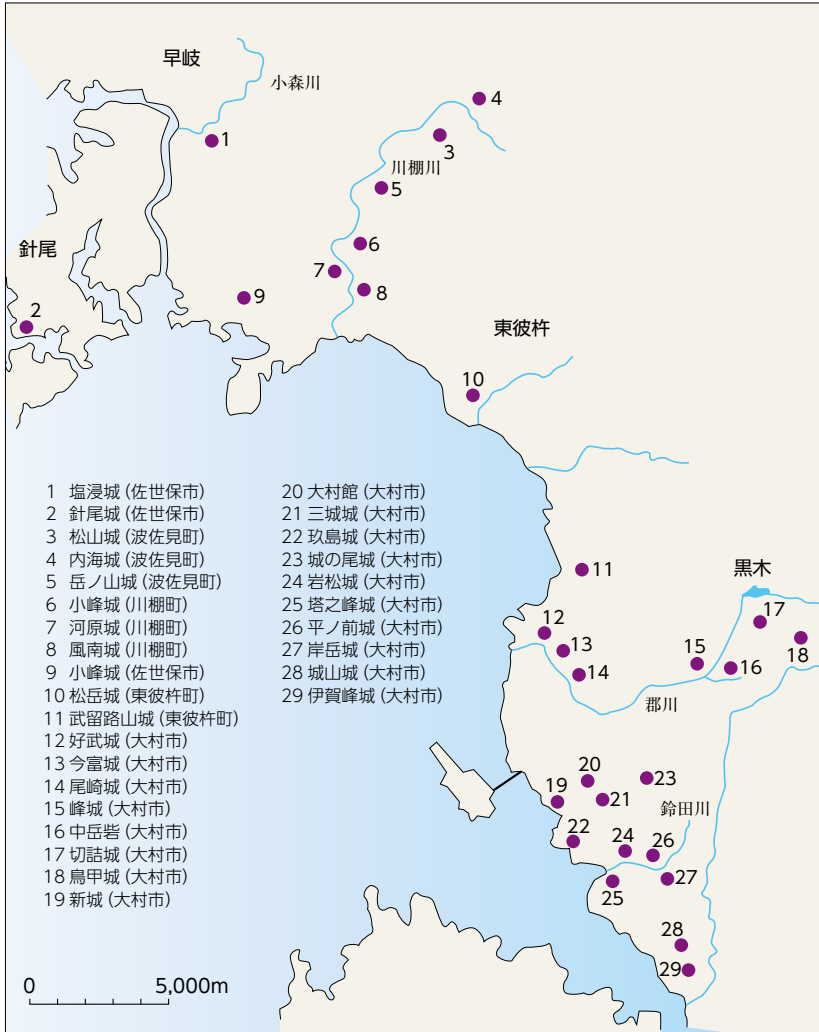


図7-22 大村市周辺における主な中世城館跡分布図

伊佐早(諫早)西郷氏との領地境であり、大村領の南側の守りを意識した城の配置を見ることが出来る。

大村市の西北部に位置する東彼杵郡の川棚川流域では、川沿いに張り出した丘陵や山頂に城館が立地している。風南城や河原城、岳ノ山城などは、武雄領主後藤貴明を警戒して配置されたといわれており、それに対峙するように後藤氏の城と伝わる小峰城を見ることが出来る。

その更に北西側の佐世保市早岐・三川内地区を流れる小森川流域は、平戸松浦領、武雄後藤領との三領境であり、天文年間から永祿初めまでは大村氏に属したが、永祿六年(一五六三)、後藤貴明に佐世保・日宇・指方・針尾を奪われ(のち松浦氏へ帰属)、更に天正二年(一五七四)、折尾瀬(三川内)までも松浦氏へ翻り、佐世保市南部すべてを失うに至った。大村氏はその後天正十二年(一五八四)、龍造寺隆信が沖田畷で倒れ求心力を失ったことを機に、天正十四年(一五八六)、純忠が旧領奪還を狙って行った井手平合戦中で塩浸城や鷹ノ巣城を使用しており、この地域は大村氏が築いた城の北限に当たる。その他、彼杵川や千綿川、江ノ串川の下流域にも僅かではあるが城館の分布が見られ、入り江が乏しい大村湾の東側沿岸では、主として中小河川とその小規模な平地を臨む丘陵地に位置していた。また、郡川上流の萱瀬から中岳、黒木に至る谷筋は肥前鹿島との往還として利用され、有馬氏や後藤氏、肥前佐賀の龍造寺氏等の勢力がここに侵入したことから、それを警戒するための城や砦が多数築かれている。

## 城館の立地と形態

長崎県内に見られる城館の多くは、海域が一望できる比較的高い丘陵や山間部に立地することが多い。これは、中世において陸路よりむしろ海上を交通路として利用したことが多かったことを裏付けている。城館の形態としては山がちな地形の稜線を利用し、堀切(3)や切岸(4)、場所によっては石積み(5)により岸を築くなどして平場を造成しており、単郭式(6)もしくは連郭式(7)がほとんどである。なお、県北部を中心に円形の曲輪(8)が多く、地域的な特徴といえる。

一方、大村氏に関する居館や居城は低地部に立地しているものが多い。大村氏の居館・大村館が標高約二〇メートル、十五世紀半ば大村純治が居城した好武城は約一〇メートル、最も緊迫した戦国時代における大村純忠の居城、三城城が約三七メートルである。

一城の形態として好武城と三城城は類似した特徴が見られる。好武城については現在家屋が集中し地形の旧状が判りにくいところではあるが、いずれも長径約二〇〇メートルの広大な低丘陵を利用し、その中高く中心に位置する部分を主曲輪とし、その周囲にはほぼ同じ高さの複数の曲輪を造成した城構えを形成している。三城城では曲輪間に明瞭な堀切及び横堀⑨が配置されており、戦国期の緊迫した状況を物語るものであるが、並郭式⑩の形状については基本的には共通しており、後に喜前が築いた玖島城にも継承されている特徴といえよう。

一方、領境にある城館は比較的標高が高い位置に立地している。東彼杵町松岳城は大村氏の出城の一つであり、大村領の北部を警備するために配置されている。山の尾根を利用したあまり広い平場をもたない山城ではあるが、眼下には大村湾と長崎街道が一望でき、標高は約二二四メートルと非常に高い。また、川棚川沿いの川棚町風南城は武雄後藤氏を警戒するためにつくられた単郭の山城であり、標高は約一二〇メートルである。大村市溝陸町にある伊賀峰城は大村領の南部で伊佐早領の領境を警備するために配置された連郭式の山城であり、標高は約一一五メートルである。

こうして見ると、大村領の領土防衛の特徴が見える。前面に大村湾、後背地に多良山系に挟まれた郡川により形成された扇状地を中心とし、その中で戦国初期期までは史料上の確認という制約を伴うものの郡川流域を拠点とし、有馬氏や龍造寺氏の勢力が高まってきた戦国時代後半には大上戸川流域を拠点としたのは間違いない。また、領地の入口には、その防備のための複数の支城を配置し警備を固めていたが、幾度となく破られ他の勢力の介入を許したことがあった。やがてその勢力を回復し領地を取り戻した大村氏はその後、その西側対岸の西彼杵半島へも勢力を伸ばした。豊穰な扇状地と後背の山岳地、前面の内海を取り入れた壮大な物構ともいえる地形⑪が、その後近世大名としての拠点となった。

### 三 大村氏に関する主な中世城館

#### ■ 一・郡川下流域周辺

##### 一・大村館

大村市乾馬場町にある館である。「大村川端の館」とも呼ばれ、大村家の上代の領主が普段に居住したところといわれている。

『大村郷村記』には「正暦五年(九九四)、太祖直澄入国、始めて久原の城に入りしより、丹後守純忠まで拾八代、平生は此の館に居住す。その後永祿七年(一五六四)春純忠三城の城を築き移住の後、大村伯耆純清の屋敷となるなり。」と記述されており、その利用された時期が知られる。三城城下絵図(「大村館小路割之図」)から推測すると、東西約九〇<sup>メートル</sup>、南北一六〇<sup>メートル</sup>であり、本堂川橋周辺の区域(標柱周辺)に当たる。ただ、現在は市街地となっており、その面影を見ることはできない。

##### 二・好武城

大村市寿古町に所在する平城である。周りを水田で囲まれた隅丸方形の集落地であり、中は宅地と畑となつているため旧状は不明である。

『大村郷村記』には「大手は巽(南東)の方、搦手は丑(北東)の方にあり、本丸は三〇〇坪(約九九〇平方<sup>メートル</sup>)、二の郭は三、六〇〇坪(約一一、九〇〇平方<sup>メートル</sup>)、四方に城壁があつて、南の方は郡川、西北は深田なり。」とある。

城の南西部は比高差が約三<sup>メートル</sup>あり、石垣が見られるが東側に行くに連れ比高差がなくなっている。『大村郷村記』にいう本丸は恐らく南西隅にある土塁と石垣に囲まれた曲輪(a)と考えられ、城域の中で最も高い部分に当たる。ただし、現在見られる石垣は近世以降の特徴であり、後世の改変を受けている可能性が強い。城の東側には幅二<sup>メートル</sup>程の水路(b)が見られ、城に伴う堀とも考えられるが、郡川対岸には律令時代から続く条里跡(12)があり、当地域

に郡衙の中心が予想されることから、その区画溝の可能性が強い。北西隅には御堂が所在する高台(c)があり、城の一部で櫓台と考えられる。

平成十六年(二〇〇四)大村市教育委員会により南側裾部分の発掘調査が行われており(13)、古代から中世前期にかけての多くの遺物が出土している。「大村郷村記」には十五世紀後半に一五代純治が築き、有馬氏と数年間戦いを行った際この場所に拠点を移したというが、調査では、戦国期の遺物は非常に少なく、城の機能がどの程度あったかについては疑問が残る。

### 三．今富城

大村市皆同町に所在する平山城である。郡川中流域沿いの東西に延びる低丘陵上にあり、現在は畑や山林となっている(14)。「大村郷村記」には、「大手は南、搦手は北の方にあり、本丸の高さは平地より



図7-23 好武城縄張図 (1/4,000)



六間(約一<sup>二</sup>トメ)、東西は四町余り(約四四〇<sup>ト</sup>メ)、南北は一町余り(約一<sup>一〇</sup>トメ)、惣郭廻り拾五町(約一、六五〇<sup>ト</sup>メ)とある。

自然の地形の稜線を利用した不定形の広い曲輪を有する連郭式の形状であり、曲輪周辺部はほとんど切岸のみの造成である。ただ大村市教育委員会が平成十九年(二〇〇七)携帯電話のアンテナ工事に伴う発掘調査を実施した<sup>15)</sup>ところ、幅約四・五<sup>ト</sup>メ、深さ一・七<sup>ト</sup>メの横堀が確認されており、周囲に堀がめぐる可能性が極めて高い。中央からやや東側に切通(a)があり、南側の集落からの生活道として使われており、東西の丘陵を分断する堀切の面影を残す。西側の曲輪(b)は、非常に切岸が明瞭で幅が広い平場があるものの、コンクリート建物跡や土採りの痕跡などかなり荒れている。ここは、明治時代に鉄道建設の際に多くの土砂が運び出されたといわれており、また昭和十七年(一九四二)から二十年(一九四五)までは日本海軍の陣地が築かれており、かなり土地の改変が行われている。東側曲輪(c)については現在ミカン畑として利用されており、東側裾部は宅地造成が行われるなど西側曲輪ほどの明瞭な切岸は見られず、城としての機能があつたかどうかは不明である。

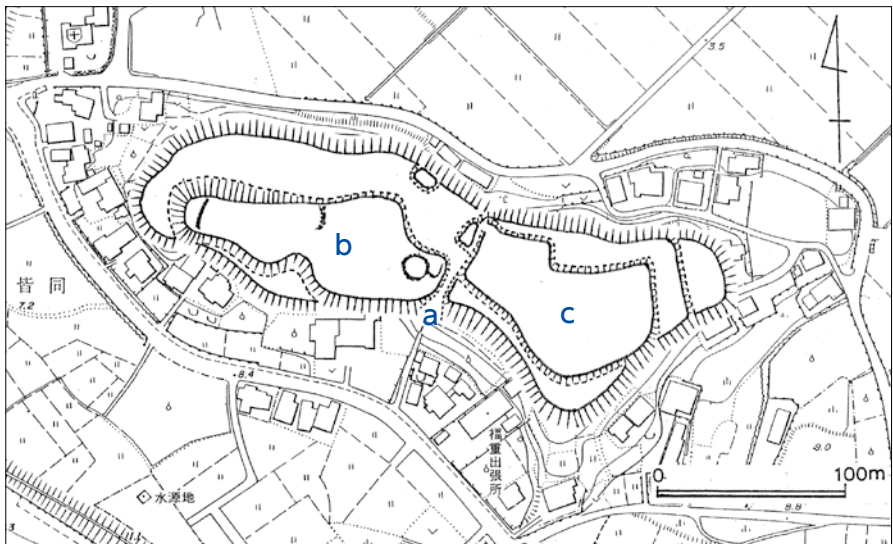


図7-24 今富城縄張図 (1/4,000)

## ■二 大上戸川、内田川流域

### 一 三城城

大村市三城町に所在する標高約三七メートルの低丘陵上に築かれた複数の広大な曲輪を配置する戦国期大村氏最大の平山城である(巻頭写真)。

『大村郷村記』には「追手(大手)は西に向き、搦手は北に向く。本丸は二、四〇〇坪(約八、〇〇〇平方メートル)、二之郭一、五〇〇坪(約五、〇〇〇平方メートル)、三之郭六〇〇坪(約二、〇〇〇平方メートル)、北之出郭五〇〇坪(約一、七〇〇平方メートル)」とある。

時期については、『大村郷村記』に大村純忠がキリスト教に入信した翌年である永祿七年(一五六四)に築城し、その子喜前が玖島城に移転するまでの約三五年間の居城とあるが、大村市教育委員会が実施した発掘調査による出土遺物からは十六世紀前半には既に存在していたことが明らかであり、築城者については文献資料とのそごが生じる。元龜三年(一五七二)、武雄領主後藤貴明が平戸の松浦隆信及び伊佐早の西郷純堯らと謀り三城城を攻撃する激戦が行われた(「三城七騎籠」)。敵軍約一五〇〇名に囲まれた大村氏の勢力は七名の家臣を中心に約一〇〇名であったが、大村氏家臣の奇策により応戦し、撤退させたという記録(16)がある。

三城城は八つの曲輪から成り立っている。曲輪Ⅰは東西約二〇〇メートル、南北約一〇〇メートルと広大な平場であることから主曲輪と推測される。北側中央部(曲輪Ⅴと接する部分)が入口部分と推測され、この部分と南東部隅に横矢(17)が見られるなど戦国期の城郭の特徴を顕著に表わしている。曲輪Ⅱは曲輪Ⅰに続く広さを有し、やや北側に緩やかに傾斜する平場であり、畑地として利用されていた。平成十三年(二〇〇一)に大村市教育委員会により行われた発掘調査(18)では、南側墨線上に二重の横堀とそれに挟まれた土塁が確認されている。ただ土塁の下からは四棟の掘立柱建物跡が確認されていることから、緊迫した戦国期において大改修を行ったことをうかがうことができる。二重の横堀の外側の堀は曲輪Ⅰの南側(曲輪Ⅶ・帯曲輪)まで続いており、その長さは約三五〇メートルと大規模である。

曲輪Ⅲは周囲を土塁で囲まれた径約六〇メートルの楕円形状の平場である。平成十五年度の大村市教育委員会による発掘調査(19)では、平場の中央にV字型の堀が確認されており、元々は二枚以上の平場があったことが推測される。また、北側の土塁の下からは古い時代の切岸が確認されており、この曲輪が大規模な造成ののちに築かれたことが推測される。南側中央に西に開口する出入口があり、階段状の遺構も確認されている。曲輪Ⅳはまわりの地形とほとんど差がない平場の曲輪であり、北西側の土塁と堀で区画されている。主曲輪への動線としては、曲輪Ⅳ西側の墨線を大手口とし、現在富松神社社殿が鎮座する位置から境内裏に上がり曲輪Ⅰ・Ⅲにかかる土塁に突き当たり、その手前から南へ曲がり曲輪Ⅴに至る。曲輪Ⅴは曲輪Ⅰの馬出し状の平場であり、西側の大手から眼下登城路にかけてを見張るには絶好の場所である。

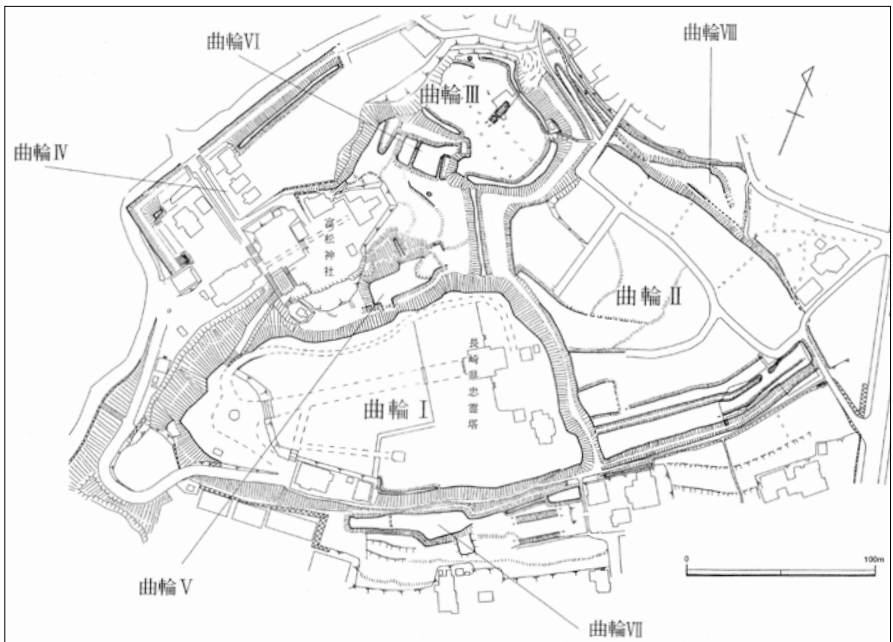


図7-25 三城城縄張図 (1/4,000)

(大村市教育委員会作成)

## 二、新城（杭出津砦）

大上戸川河口の右岸に広がる標高約四メートルの平地上に立地する平城である。現状は宅地と水田であり、当時の遺構はほとんど見られない。

『大村郷村記』には杭出津砦として、「大手は巽（北東）の方、搦手は戌（北西）の方に向き、郭内三〇〇坪（約九九〇平方メートル）」とあり、天正三年（一五七五）に大村純忠が構えたという記述がある。当時、純忠は肥前佐賀の龍造寺隆信と交戦しており、龍造寺氏と和睦して大村領内を攻めとらんとした平戸松浦氏の海域からの襲来に備えるため、家臣の今里政勝、政清父子を置いて守ったという。

その後、喜前の代になり、朝鮮出兵時の経験から防御を考慮すると海際に近い位置が望ましいということから、この杭出津で居城の築城を始めた。ただ、普請の途中で一部の家臣から要害としては適さないということから中止され、玖島の地に移されたという。矩形の水田に囲まれた微高地にある大村市農協会館がある場所が城の中心地と考えられるが、現状の地形から判断することは難しい。

## 三、玖島城

大村市玖島一丁目に所在する標高約一七メートルの近世城郭である。慶長三年（一五九八）、大村喜前は朝鮮出兵時の経験から、海に近い要害こそ防衛に適すると考え、もともと島であった当該の地に築城し、大村氏の近世における居城として幕末まで機能した。長崎県内における織豊系城郭としては、壱岐市勝本城や対馬市清水山城、南島原市原城など⑳がある。

玖島城は幾度となく城の修理が行われて、また周囲も公共施設があちらこちらに作られているため、当時のままの様相を見ることはできないが、随所に中世から引き継がれた城づくりの形状が観察される。



写真7-21 新城近景



写真7-22 玖島城虎口

現在の本丸への大手口は南側であるが、元来は北側であった。いろは坂には本丸の石垣とは明らかに異なる古相の石垣(a)が残る。また、本丸西側にみられる横矢と槽台を有する鉤形に折れ曲った巨大な堀(b)は海上からの防御を明らかに意識した築城当初の形状を残す遺構と推測される。

現在見られる玖島城は、第二〇代大村純頼が行った大改修後の姿であり、その際、加藤清正の助言を受けたといわれている。城に入る

には長堀と南堀の間を渡る土橋から入り、大きく西側に曲がり更に三度折れて二の郭(c)に至る。二の郭に取りつくように本

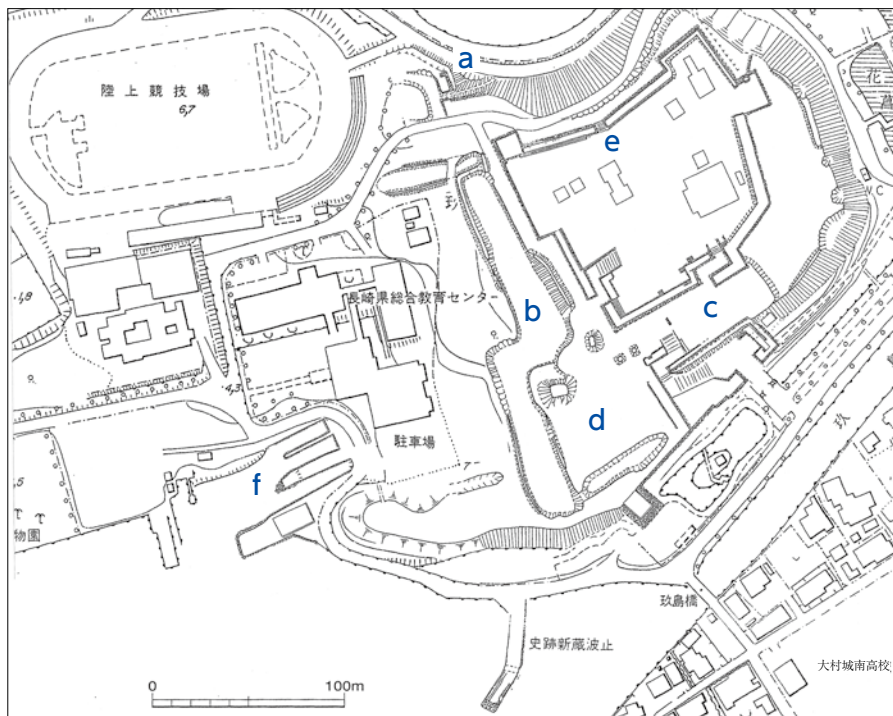


図7-26 玖島城縄張図 (1/4,000)

(長崎県教育委員会作成)



写真7-23 大村藩お船蔵跡

#### 四、城の尾城

大村市東大村二丁目に所在する、大上戸川上流にある標高一八〇メートルの丘陵地に所在する細長い尾根を利用してつくられた山城であり、城の西方約三キロメートルの大上戸川下流には三城城がある。

『大村郷村記』によれば、「頂上平地凡そ三畝程(約三〇〇平方メートル)、中段に長さ壱町(約一一〇メートル)、横三間余り(約五メートル)の平地あり、土人は是を馬乗馬場と云う、三方大岩石にて險阻なり、丑寅(北東)の方に土手隍の形あり、城の尾谷の方川より一騎通りの道あり」とある。ただ、『大村郷村記』に記録はあったもののその位置については確認されていないが、平成十四年(二〇〇二)に大村市教育委員会により発見された<sup>21)</sup>。

遺構としては、土塁や堀切、横堀、豎堀<sup>22)</sup>などが見られる。

東側最高所(主曲輪)に低い土塁に囲まれた方形の区画(a)があり、その西側には階段状に複数の狭い平場が形成されている。堀は主曲輪の東斜面と鞍部の二重につくられており、鞍部の横堀の外側には低い土塁(b)が見られ

丸の南と西に二カ所の虎口が見られる。本丸の南西側には外郭(d)があり、南隅には櫓台がある。市制施行記念で板敷櫓が建設されたが、過去に行われた大村市教育委員会の調査では建物の遺構は確認されていないらしい。本丸の北側には東西に横矢掛けの張り出しがあり、中央の搦手口にかけて墨線が僅かに「く」の字型になった平入りの虎口(e)が残る。城壁には狭間が復元されており、当時の面影をうかがうことができる。城の西側の海に面したところには「大村藩お船蔵跡」(f)がある。現在残る石積みの上には等間隔に穿たれた方形の柱穴が残っており、覆い屋があったことがうかがわれる。お船蔵は昭和四十四年(一九六九)四月二十一日に県指定史跡となっている。本丸の館や櫓も壊され、のちに本丸跡には歴代の藩主を祀る大村神社が創建された。現在では、大村公園として市民の憩いの場となっている。

る。また南側斜面には四本の豎堀(c)があり谷部まで続いている。西側の細長い丘陵には方形を意識してつくられたと思われる数ヶ所の曲輪があり、途中鉤形に屈曲する堀切(d)で断ち切られている。主曲輪と西側曲輪との接した部分には南に下る道(e)があり、南側を流れる河川の水場までつながっている。

西側の曲輪周辺には十四世紀後半〜十五世紀前半までの貿易陶磁器や国産陶器の貯蔵容器などが多数表採されており、南北朝から室町時代にかけてに主に使われた城といえる。ただ四条の豎堀があることから戦国期の様相をうかがうことができ、三城城との位置関係からしてもそれを意識して築かれた城と推察できる。方形を意識した曲輪の構造や、豎堀群や石積みの技術、鹿島から大村へのルート上に位置することなどを考えると大村氏というよりも、侵攻する佐賀側の勢力が築造し、戦国時代に大村氏攻めを行う際にも陣城として利用された城ではなかるうか。

### ■三 郡川上流域

#### 一 鳥甲城

大村市黒木町・中岳町の境界に所在する、標高約七七〇メートルの鳥甲岳の山頂付近にある城といわれる。鳥甲岳は佐賀県鹿島市へ通じる往還の東側にあり、山頂から摩利支天宮まで細長く続く岩山である。城について『大村郷村記』には、「頂上東西拾六間(約三〇トビ)、南北五間(約九トビ)程の野地なり。東の方高く、西南の方深谷、三方岩石にて峙て、甚だしく嶮阻なり。」とある。文明六年(一四七四)の大村純伊の時代に、有馬貴純との中岳合戦の際、この城に立

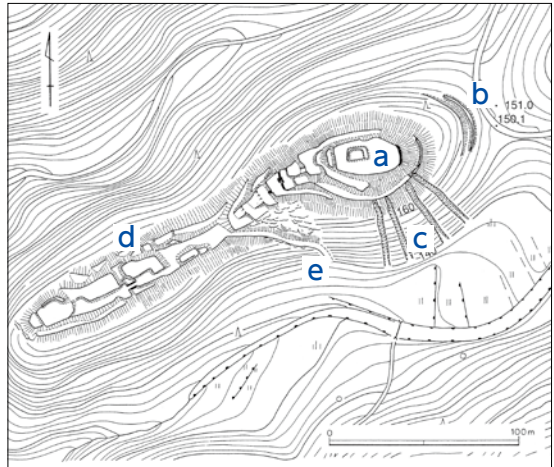


図7-27 城の尾城縄張図(1/4,000) (長崎県教育委員会作成)

て籠ったという。

ただ、「頂上」には『大村郷村記』に記述されているような規模の平地は確認できない。板状玄武岩の露頭した部分が尾根上の西側に多く見られ、人為的な石積みに見うけられるところもある。城の立地から推測すると、鹿島からの往還を見張る機能が考えられるが、かなり奥まった山地であり、山頂部の木々を除いたとしても眼下への見通しは悪い。尾根の東方に摩利支天宮の祠がある平地があり、ここは切岸が明瞭で、眼下に黒木の集落と道路を見ることができる。見張り台としての機能を求めるのであれば、この場所が有力と思われる。

## 二・切詰城

大村市中岳町久良原に所在する標高約三七〇メートルの山頂部に所在する城である。鳥甲城と同じく鹿島へ通じる往還の東側にあり、その標高の高さから緊急時に避難する詰めめの城としての機能が推測される。

『大村郷村記』には「頂上には長さ拾九間（約三五メートル）、横拾三間（約二二メートル）程の平地あり。西の方へ長さ拾間（約一八メートル）、横七間（約一二メートル）の尾続あり。次に又長さ式拾式間（約四〇メートル）、横七間（約一二メートル）の平地あり。何れも樹木繁茂す。三方は大岩絶壁、其の高さまるべからず。大手は西の方にて、今に木戸の形現存す。」とある。

曲輪は極めてシンプルな形状で東西にやや広めの曲輪があり、その間を狭小の通路状の平地でつないでいる。ただ、切岸は明瞭で南北両斜面ともに切り立っており、外部からの侵入は不可

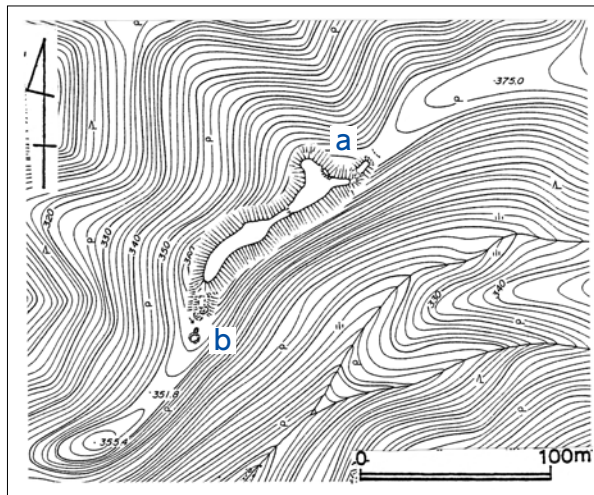


図7-28 切詰城縄張図 (1/4,000)



能に近い。また、東側の曲輪の東岸には土塁状の高まり(a)が見られ、その下段に東側から延びる丘陵を断ち切る堀切が残る。西裾の堀切には『大村郷村記』に木戸との記載があるように高さ一丈ほどの矩形の石積み(b)があるが、結果的に堀幅を狭めることとなり、城に伴う遺構かどうかは不明である。城の周囲は自然石や崖面が立ちはだかつており、自然地形を利用した堅固な要塞といえる。

この城は、十六世紀の半ば、有馬晴純の次男である純忠が大村純前の養子として迎えられ、純前の実子である貴明が武雄の領主後藤純明の養子として出されたことから起こった家中の騒動が治まるまでの約三カ年の間、この城に居住したといわれている。ただ、この場所に長期滞在することは非常に困難であり、文献資料の真偽は不明である。

### 三・中岳砦

大村市中岳町にある砦である。郡川と南河内川の合流する場所で西に鹿島への往還を臨むことができる。また、その南西側には峰城(3)を望む。城下一帯は、有馬氏との間で行われた中岳古戦場の跡地といわれている。

『大村郷村記』には、「真中に廣さ四畝(約四〇〇平方丈)ほどの小高き所あり。廻りに陸(はら)の形あり。」とあり、文明六年(一四七四)の中岳合戦の際に、大村純直

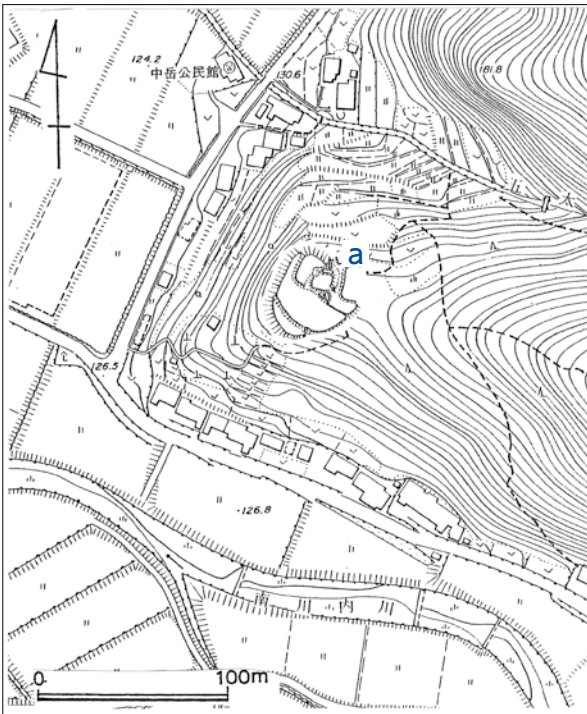


図7-29 中岳砦縄張図(1/4,000)

がこの砦に籠もったといわれている。

砦は約一〇<sup>㊦</sup>四方の主曲輪とその西側に二ノ曲輪、更にその南側に広い三ノ曲輪が階段状に配置されている。主曲輪には北側に櫓台があり、現在は「山神宮」と書かれた祠が祀られている。主曲輪及び二ノ曲輪の切岸は非常に明瞭であり、二ノ曲輪の北側隅には横矢が見られる。三ノ曲輪の周囲には一部に崩落が見られる乱積みがの石垣が見られるが、当時のものとしては考えにくい。曲輪の東側には堀切(a)が残り、現在は通路として利用されている。堀切に接する主曲輪の南北には、堀切から二ノ曲輪への侵入を防ぐための土塁が見受けられる。曲輪の周囲は、畑として利用されているため旧状は不明である。

#### ■ 四・鈴田川流域

##### 一・平ノ前城

大村市平町に所在し、平成二十一年新幹線建設に伴う分布調査の際に新たに確認された山城である。多良山系から南にのびる丘陵の先端部に位置し、標高約六〇<sup>㊦</sup>の幅狭の低丘陵上に立地している。主曲輪部分は隅を明瞭に持つ長方形状で、北側は現在ミカン畑となっているものの切岸が明瞭で、曲輪西側と北側には二段から三段の帯曲輪や腰曲輪が配されている。主曲輪の南側には堀切(a)とその内側に土塁が残る。更に南側先端部は曲輪の存在が予想されたが、切岸など明瞭な遺構は観察されなかった。『大村郷村記』の鈴田村の古城の記録にはいくつかの城の記述があるが、この平ノ前城がどの城に当たるかは不明である。

平ノ前城の南側の鈴田川対岸に、隅丸の方形を呈する館がある。今は浄土宗専念寺という江戸期由来の寺院があるが、墓地の中に南北朝以降の中世石塔(残欠)が数基分確認できる。こうした館と隣接する高台部分に小規模な山城を有するという構えは長崎県周辺の城館に時々見られる特徴といえる<sup>(24)</sup>。

##### 二・岸高城

専念寺のある館から南東側に約五〇〇<sup>㊦</sup>離れた地点に岸高城はある。『大村郷村記』には、岸高の古城として「城

構へ、東西拾三間(約三三メートル)、南北貳拾間(約三〇メートル)程」とある。

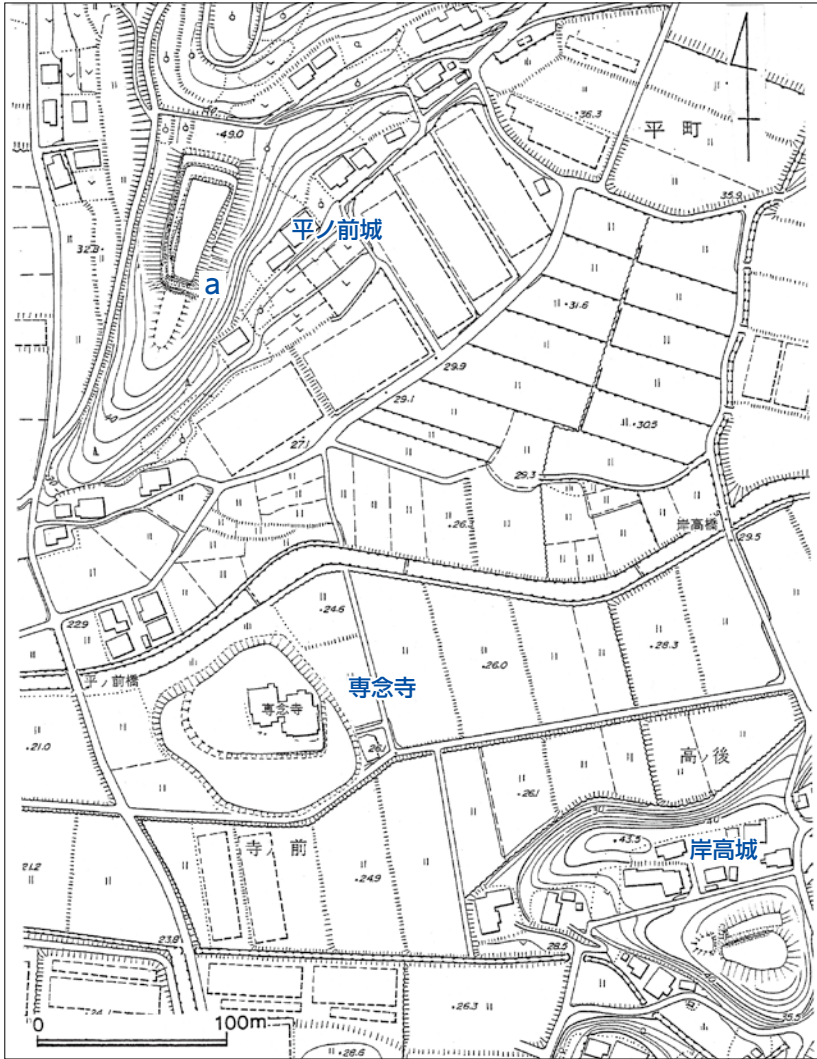


図7-30 平ノ前城、専念寺、岸高城 (1/4,000)

曲輪は楕円形の主曲輪と北側につく腰曲輪からなり、主曲輪の周囲は切岸が明瞭である。また腰曲輪の北端は道路と民家で削られており、曲輪の西側には二重の堀切が残る。

城の立地や規模から推測すると、平ノ前城及び館と同じ時期に、街道沿いの領地の東境を守った砦であり、

曲輪は楕円形の主曲輪と北側につく腰曲輪からなり、主曲輪の周囲は切岸が明瞭である。また腰曲輪の北端は道路と民家で削られており、曲輪の西側には二重の堀切が残る。

伊佐早領西郷氏を警戒するために築かれたものと考えられる。

### 三・塔之峰城

大村市陰平町に所在し、鈴田川流域を守る城②の一つである。鈴田川の南側に位置し、標高約四〇メートルの低丘陵上に立地している。

『大村郷村記』には「頂上平地東西拾六間(約四七トメ)、南北拾貳間(約二二トメ)、雑木山四面切岸の如し」とあり、昔諫早の領主西郷氏の軍勢が鈴田村に攻め込んできた時に、朝長右衛門太夫純職が防戦し討ち死にした戦に使った城といわれている。

中央に楕円形の自然地形を残した緩やかなつくりの主曲輪があり、その両側に切岸が明瞭な幅広の帯曲輪が配置されている。曲輪の南側、現在市道の切り通しには堀切があつた可能性がある。曲輪の北側には堀切(a)と土塁が見られ、その北側には緩やかな細長い丘陵が伸びるが、切岸などの遺構を見ることはできない。

### ■五・大村湾南東沿岸・東大川流域

#### 一・城山城

大村市今村町に所在する約七五メートルの丘陵上に位置する山城である。先端は長崎自動車道今村パーキングエリアで削り取られ完全な形状を見ることはできないが、主曲輪や土塁、腰曲輪、帯曲輪、堅堀などが明確に残存している。

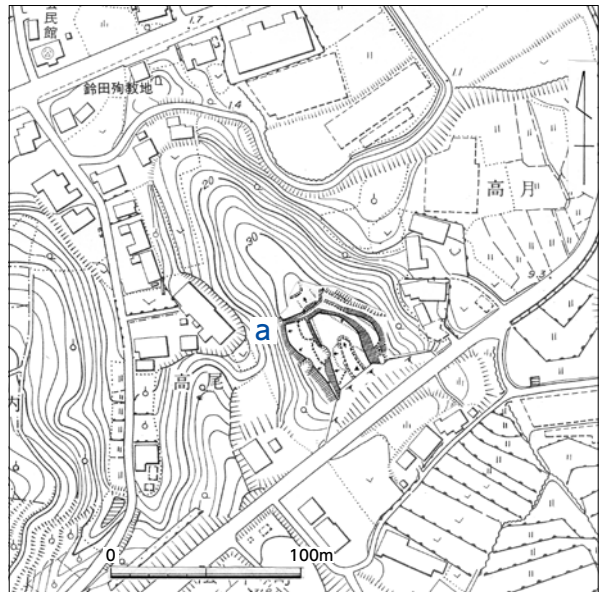


図7-31 塔之峰城縄張図 (1/4,000)

(大野安生作成)

主曲輪(a)は楕円形を呈し、東西には土塁が残る。また、主曲輪の西側の一段下がったところに幅広の帯曲輪、南東側にも帯曲輪が残る。主曲輪南西の曲輪の南斜面には幅広の縦堀(b)がみられる。また、西側にはコの字形の土塁に囲まれた曲輪(c)があり、西側から続く尾根への守りを考慮している。かなり内陸に所在するが、眼下に伊佐早領との領境を見下ろすことができ、伊賀峰城と同じく、西郷氏を警戒する目的で配置された城と考えられる。

## 二・伊賀峰城

大村市溝陸町に所在する標高約一一五メートルの山頂にある山城である。城山城と同じく諫早市との市境に隣接している。伊佐早領西郷氏の端城である真崎城に対峙する位置にあり、大村領の最も南に当たることから大村氏が築いたものと推測されるが文献などには現れてこない。

『大村郷村記』には「上の広さ東西拾三間(約二三メートル)、南北四拾六間(約八三メートル)、都て島地なり」と記述されており、現況とほぼ同じ規模であることが分かる。

山頂には随所に玄武岩の巨礫が露頭しており、五〇年前の諫早大水害の際に災害復旧用の石材を採取した痕跡が生々しく残っている。山頂には夫婦石と呼ばれる巨礫があり、その根元には「伊賀峰善四郎」を祀る祠がある。

主曲輪(a)と二ノ曲輪(b)で主に構成され、東側に帯曲輪が見られる。主曲輪には、低い土塁と人頭大の礫を主体とする野面積みの石積が残る。東側の帯曲輪は部分的に後世の改変があるものの極めて明瞭な切岸が残っている。二ノ曲輪の北側には土塁と堀切があり、南西隅には二ノ曲輪から主曲輪へ至る城道が見受けられる。南側には随所

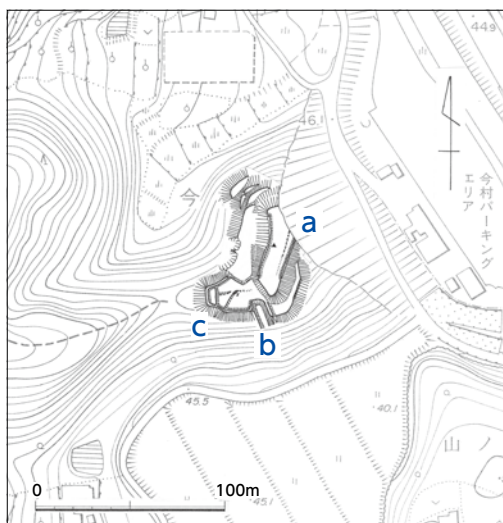


図7-32 城山城縄張図(1/4,000)

(大野安生成作)

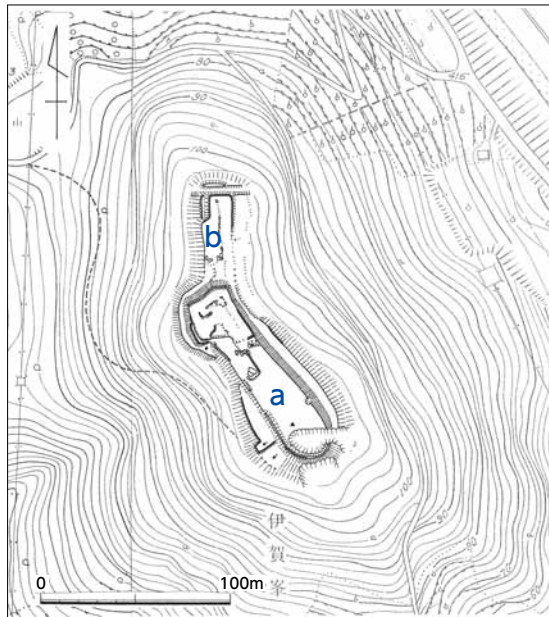


図7-33 伊賀峰城縄張図 (1/4,000)

(大野安生作成)

なく、他の領主からの制圧を受けている。大村純伊の一時期には、大村が有馬氏の制圧下であり、有馬方の皆吉左馬介が守る松岳城に対し必死に攻撃を行い奪回することに成功したといわれている。その後、純忠の頃には、後藤貴明が当城一帯を一時期支配していたといわれており、永禄五年（一五六二）年の有馬氏と龍造寺氏との戦い（丹坂合戦）の際は、貴明の家臣である彼杵喜之助がこの城にいたといわれている。

主曲輪に天正期の特徴を有する石垣（a）があり、西曲輪に約五〇メートルの延長の

に平場が見られ、位置としては伊佐早領を望める位置ではあるが、採石の痕跡から本来の姿を見ることができない。

## ■六 大村湾東岸・東彼杵周辺 一 松岳城

東彼杵郡東彼杵町三根郷に所在する標高約二二四メートルの番神岳の山頂に所在する山城であり、大村氏が築城した出城の一つである。

『大村郷村記』には「東西田原、南北深谷にて山也。頂上廣東西三町（約三三〇メートル）、南北貳町（約二二〇メートル）程」と記録されている。

この城は幾度と



写真7-24 松岳城主曲輪の石垣



写真7-25 武留路山城遠景

人頭大の円礫を積み上げた石塁**(b)**が見られる。主曲輪の石垣は北東側のみに見られ、そのほかの方面には石垣はなく、崩落した状況も確認されない。そのほかの遺構については自然地形を利用して形成されたと考えられ、明瞭な曲輪は見られない。南曲輪**(c)**には神社が立地し、平坦地と斜面の造成は神社建立の際に削平されたという話もある。この位置からは、東に長崎街道、南

西には大村湾を一望でき、大村領下を監視するには極めて良好な立地といえる。

## 二、武留路山城

東彼杵郡東彼杵町に所在する、標高約三三〇メートルの武留路山の山頂にある石塁を有する山城である。

『大村郷村記』に「四方に石垣があり、北の方に門跡がある。由緒や謂われ等については不明、矢や刀などが掘り出された。」とある。

山頂部の等高線に沿うように、楕円形状の石塁が約二〇〇メートル以上取り巻いている。

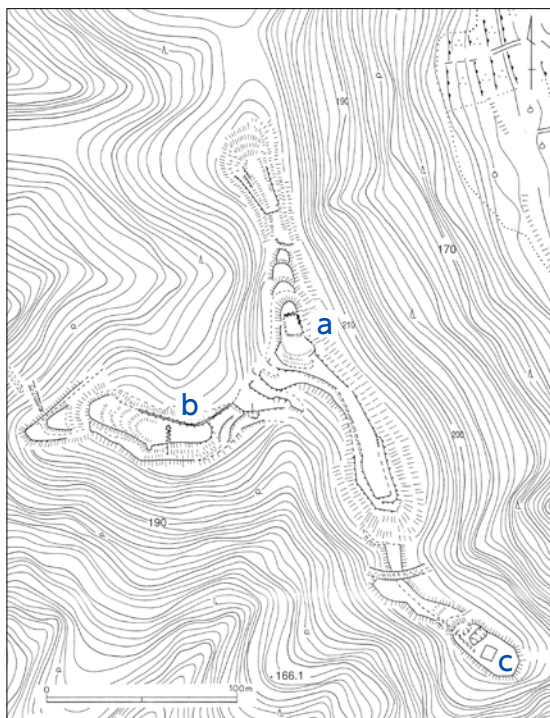


図7-34 松岳城縄張図(1/4,000)

石塁は高さ約二メートル、幅約一・五メートルを測り、ほぼ垂直に近い立ち上がりをしている。石塁の内側には井戸と伝えられる石組み遺構や東西方向に一条の石列が残存する。武留路山は郡川流域周辺の扇状地を中心としてどこからでも見ることができランドマークであり、逆に言えば大村の領地を一望できる防備の要として機能したということが推測される。

## ■七 川棚川流域

### 一 河原城

東彼杵郡川棚町上組郷に所在する、標高約三〇メートルの低丘陵上にある平山城である。戦国期に大村氏の出城として建てられ、大内氏の勢力が大村に侵攻した際、矢次某という者を大将として川棚中の武士や農民が立て籠もり、大内方の一手の大将である阿曾某なるものを討ち取ったという記録がある。

川棚川に張り出す幅広の低丘陵の先端を堀切で断ち切って城域を作り出している。

現況は畑地であり、城内部はかな

り改変されているが、曲輪の形状を類推することは可能である。主曲輪(a)には幅広の広大なコの字形の土塁があり、背部は明瞭な切岸がある。また一段下の南東側には二ノ曲輪(b)があり、その両側にも幅広の土塁が主曲輪とつながった状態で配置されている。西側の堀切(c)は明瞭で北西から南東にかけて傾斜してお

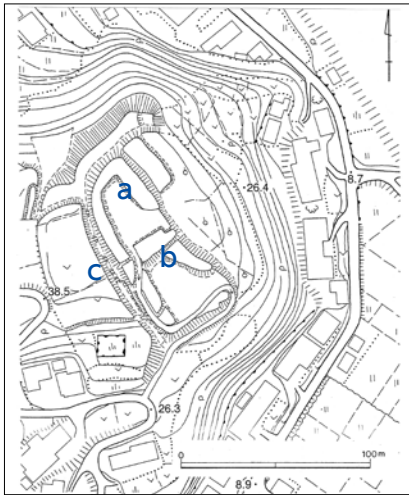


図7-35 河原城縄張図 (1/4,000)



写真7-26 河原城遠景



り、四カ所ほど土橋状の障子堀かのような痕跡が見られる。城の東側先端部には鎌倉後期以降の五輪塔ごりんとう、宝篋印塔ほうせきいんとうが寄せて祀られている(26)。

土塁の規模や堀切の状況などをみるとかなり防御を意識した形状であり、正面には風南城を望む。戦国期に肥前武雄の後藤氏を警戒するために築かれた館城と推測できる。

## 二・風南城

東彼杵郡川棚町百津郷に所在する、標高約一二〇メートルの城山山頂に立地する山城である。小峰城を占領した後藤勢に対して大村氏が拠点を置いた山城の一つであり、急時の際は山道・岩立・上組・下組などに住む一三人の武士が頭になり、百姓たちもかけつけてこの城を守ったといわれている。

北西に延びる丘陵の先端を二重の堀切及び土塁で断ち切り、楕円形の曲輪を作り出している。主曲輪は単郭で非常に規模が大きく切岸が明瞭である。主曲輪の両側には小規模な帯曲輪があり、一部は帯曲輪と堀切の堀底がつながっている堀切の東側斜面は幅広の堅堀(a)としており、戦国時代における軍事的様相を顕著にあらわす山城といえる。

## 三・松山城

東彼杵郡波佐見町金谷の標高約一三〇メートルの山頂に所在する山城である。文明十二年(一四八〇)年から約八〇

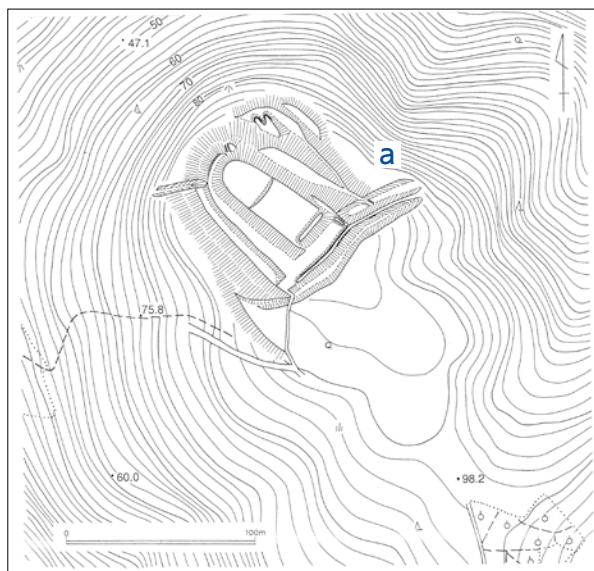


図7-36 風南城縄張図 (1/4,000)

(長崎県教育委員会作成)

年間、城主福田氏と武雄の後藤勢との攻防があったとされる。山頂の三方に延びる尾根上に曲輪は立地している。

中央の最も高い南北に延びる部分に南北約50mの主曲輪がある。その中央には櫓台状の高まり(a)が残る。主曲輪の北東及び北西側には明瞭な堀切(巻頭写真)や土塁が残り、北側からの尾根筋を断ち切っている。また、南側は一段下に横堀と土塁(b)があり、南側斜面の守りを固めている。

城が立地する場所からは、波佐見町内を直接見ることができず、主曲輪は山頂の中でも最も奥まった場所である。松山城のある丘陵の北側には矢岳城があり、西側の丘陵頂部にも小規模な城が確認されることから、複数の城をもつて領地の防衛を行っていたことが推測できる。

#### 四、小峰城

佐世保市長畑町に所在する、標高約50mの丘陵上にある山城であり、現在は曲輪内には愛宕神社及び周辺はミカン畑として利用されている。

文明七年(一四七五)に宮村通定が築城したといわれ、永正年間に宮村氏は断絶し、代わりに大村純次が城主となるが、慶長十二年(一六〇七)年に本家大村氏に追放され、廢城となる。

『大村郷村記』には「高さ一町余、大手西の方、本丸東西三十間、南北八間、石垣の高さ五尺或いは六尺。腰部東

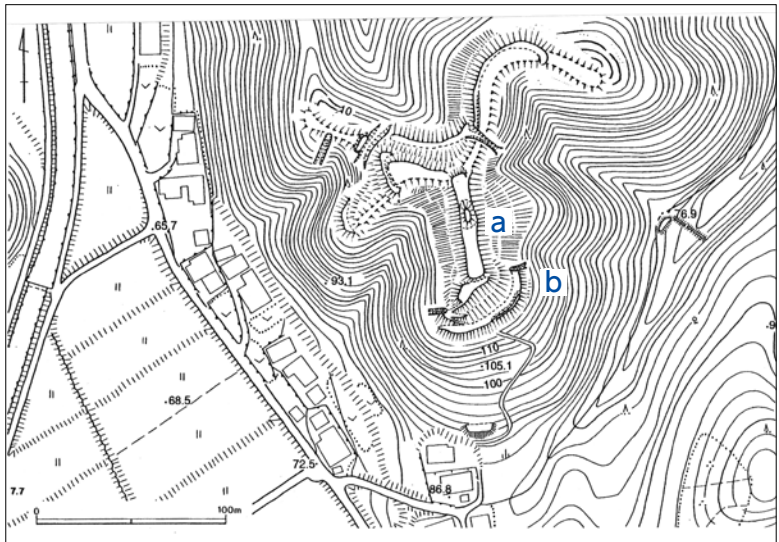


図7-37 松山城縄張図(1/4,000)



写真7-27 小峰城近景

西三十間、南北二十間、四方堅固の城なり」と伝えられている。

主曲輪には愛宕神社の鳥居と祠があるが、それ以外の施設はない。主曲輪は径が約三〇間の楕円形の形状であり、切岸は見られるもののそのほかの遺構は見られない。また、北西側に小規模な複数の曲輪があるが、明瞭ではない。

宮村の領地を治めるには

適地と思われるが、戦国期の様相は遺構から見ることができない。主曲輪は石塁で囲まれていたと文献に記されているが、一部を除いては明治初年に他へ運ばれたといわれている。

## 五 内海城

東彼杵郡波佐見町湯無田郷に所在し、標高約一六五間の山頂に立地している。

大村氏が武雄の後藤氏に備えた出城の一つであり、元来は在地領主の内海修理亮泰

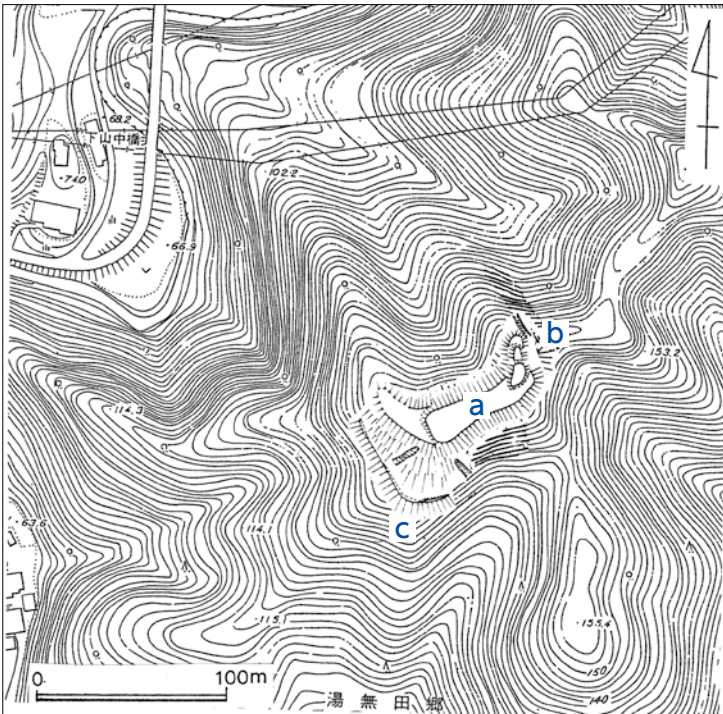


図7-38 内海城縄張図 (1/4,000)

平が築いたとされるが、のちに大村氏の被官となった。

尾根上の細長い曲輪が主曲輪(a)であるが、切岸はあまり明瞭ではない。東側の尾根上にはそれを断ち切るために浅い堀切が見られる。また、北西側の一段下がったところには不明瞭ではあるが横堀と土塁(b)が残る。南西側の一段下の部分には帯曲輪状の平場(c)があり、主曲輪との比高差がかなりあるため、その機能については不明であるが、松山城にも同じような遺構が残ることから、この地域にみられる特徴のある遺構と考えられる。

城の南西には館という地名があり、眼下には波佐見の街並みを一望する城である。城内に家臣を抱えるほどの曲輪はなく、急時の際の詰城や砦としての機能が想像される。

## ■ 八、早岐周辺・小森川流域

### 一、塩浸城

佐世保市塩浸町及び下の原町に所在する標高約五〇メートルの平山城で、小森川により削り出された細長い丘陵上に立地しており、北側は自然の崖面を利用している。平戸松浦氏の支城である井手平城の攻略のため、天正十四年(一五八六)に大村純忠が築城したといわれている。

最頂部に東西約二九メートル、南北約一一メートルの主曲輪を持ち、主曲輪の西側には細かく区画された数段の曲輪が配されている。城の南東側は幅が広い二重の堀

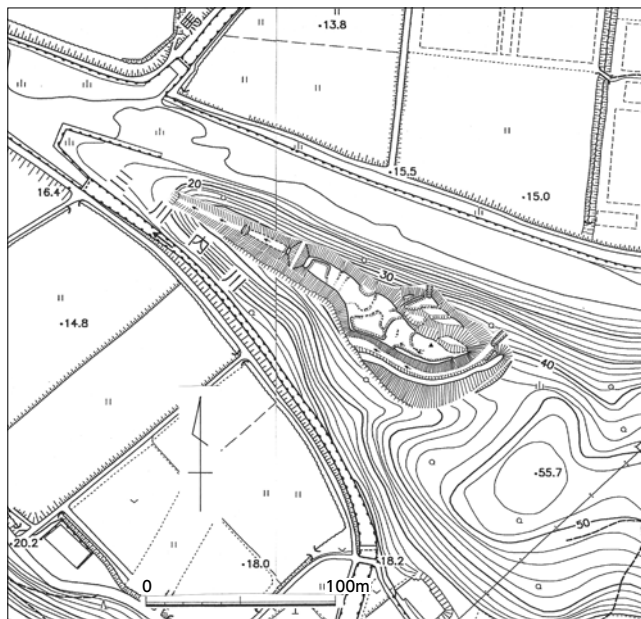


図7-39 塩浸城縄張図 (1/4,000)

(大野安生作成)

切と土塁で寸断され、内側の堀切は曲輪の南側まで続いている。丘陵西側には二カ所の小規模な堀切が残る。

曲輪内部の区画は不明瞭であるが、後世に土地の改変などはほとんど受けていないため、残存状況は良好といえる。曲輪の形状から判断すると、構築にあまり時間をかけずに築かれた粗雑な感があるものの、東側から南にかけての堀切は深く、背面からの防御は十分に考慮されている。井手平城との位置関係や歴史的な背景から考えると、井手平攻めのために短期的に築かれた城の様相が強く感じられ、戦国時代の太田氏と平戸松浦氏との攻防をあらわす特徴的な山城といえる。

## 二．針尾城

別名小鯛城ともいい、佐世保市針尾中町に所在する標高約二五メートルの丘陵先端に位置する単郭の館城である。佐世保港から大村湾への入口部分に立地しており、海上交通を押さえるために配置された城である。

文献として、一四世紀前半に針尾兵衛太郎入道覚實の名が初見する。また、針尾伊賀守の頃には、フロイスは「日本史」(※『フロイス日本史(第一部四八章)』)の中で「大村の家臣で針尾という殿」と伝えていることから、大村純忠と主従関係にあり、横瀬浦に近い針尾瀬戸の要衝後の地に城を構え、南蛮貿易の警備に当たっていたことがうかがえる。しかし、永禄六年(一五六三)、針尾伊賀守は武雄の後藤貴明の大村領攻撃に呼応して横瀬浦において宣教師襲撃事件を起こし、純忠から反撃を受け、領地を焼かれ追放されたという記録がある。

東西約三八メートル、南北約四〇メートルのほぼ円形に近い主曲輪であり、北側は三重の土塁と二重の堀切で分断され形成されている。堀切と土塁との比高差は約三メートルであり、非常に明瞭である。

平成十六年(二〇〇四)に佐世保市教育委員会により発掘調査が実施され、六棟の掘立柱建物跡と石列が確認され、十三世紀から十六世紀後半にかけての貿

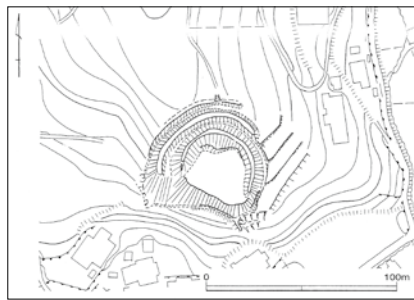


図7-40 針尾城縄張図(1/4,000)  
(長崎県教育委員会作成)

易陶磁器や国産陶磁器等が多数出土している。

#### 四 大村市周辺における中世城館の特徴

最後に、大村氏に関する城館の推移について、立地と形状を中心にまとめてみたい。

大村氏の出自に関しては諸説あり未だ明確ではない。郡川の流域に所在する好武城は一五代純治の城と伝わるが、郡川が大きく屈曲する位置であり、船を寄せる場所としては適所といえる。好武城は中心の高台部分を除いては中世城郭の特徴を見ることはできない。東側の低地部にみられる堀についても比高差はなく、土塁なども伴っていないことから防御的な性格を有するとはいえない。区画溝であろうか。

一六代純伊の時代には有馬氏の侵入を受け、防御性の高い城を必要とした。好武城後背地の高台は、切岸を施すなど単純ではあるが当時としては防御的な機能を施した今富城が登場した。近代のことではあるが、この場所が日本海軍の要塞として利用されているということは、周辺一帯を見渡せる地であったことをうかがうことができる。

純忠期に最も抵抗勢力であったのは武雄領主後藤貴明と考えられる。当時後藤氏は平戸の松浦隆信の子と養子縁組を行っており、両者が結託して攻め込んだ。純忠は大上戸川流域の三城の地に今までにない大規模な横堀や土塁を巧みに駆使し、極めて強力な戦国期城郭を築き上げた。その城郭としての機能は、元龜三年（一五七二）に起こった後藤貴明らの軍勢からの攻撃を守り抜いたことから証明された。

その後、一九代喜前は文禄・慶長の役に出陣した後、その経験から海域に面した場所が防備に極めて有利であるという判断のもと、まずは杭出津の地に、再考の後、玖島の地に城を普請した。

こうしてみると、大村氏の居館となる城館群は比較的低地部若しくは低丘陵上に位置し、山がちで起伏の多い長崎県内においては非常に特異といえる。これは大村領のほとんどが扇状地によりつくられた広大な平地であることが一つの理由と思われる。

ただ、その領地を守る支城は、山頂に近い位置にそれも複数の城館により構成されてつくられている。

領内で多くの城館が確認されている地域の一つは鈴田川流域である。ここは大村から諫早に至る鈴田峠を越える近世の長崎街道沿いであり、伊佐早領西郷氏との領境でもある。河川の両側から張り出した丘陵の最頂部に複数の単郭の城が築かれている。特に残りが良い塔之峰城と平の前城は、丘陵の上下を堀切により区画し、その間に自然地形を残した平場を形成するつくりであり、両側に幅広の帯曲輪を配置することも類似した特徴といえる。

一方、郡川上流域の萱瀬付近は低地部の平山城（峰城）とそれを見下ろす砦（中岳砦）、更に外敵の侵入を監視するために高い山頂に築かれた山城（鳥甲城・切詰城）と三段構えで守りを固めている。遺構のつくりとしては切岸中心であるが、中岳の砦は堀切が明瞭で深く、曲輪の北西隅に横矢が見られるなど戦国時代の様相を見せる。

川棚川流域は後藤氏を最も警戒した場所であり、後藤氏が築いたといわれる小峰城に対峙して、河原城や風南城がある。両城の立地条件はかなり異なるものの、大規模な堀切と土塁を設け、戦国期城郭の特徴を有している。

更にその上流の波佐見には、松山城や内海城などがある。大規模な平場の造成は行わず、山の稜線をそのまま用いて城を構成している。東彼杵町にある松岳城も同様な特徴を持つといえよう。

大村氏はこの大村の地に領地を構えるにあたり、恐らく背後の多良山系を防御線として、郡川流域の扇状地に広がる黒丸の肥沃な耕作地を生産基盤とし、前面の穏やかな内海である大村湾を良港と見たに違いない。大村氏は中世以来この地に居住するにあたり、有馬氏、後藤氏、西郷氏、龍造寺氏といった諸大名や近隣領主の侵攻を許したものの、いずれも排除もしくは復領再興し、最終的には明治時代の廃藩置県までその権力を維持することになる。その間にこの領地につながるすべての往還に複数の城館を配置し守りを固め、徐々に小領主を吸収しながら大村湾や西彼杵半島、長崎までも領地とした。そのすさまじいほどの貪欲さ執拗さに戦国大名としての大村氏の姿を見ることができ、その後ろ盾として何があったのか。キリスト教を介した外国との交易がその大きな要素の一つとなったことは間違いない事実ではあろう。

（寺田正剛）

- (1) 長崎県教育委員会編『長崎県中近世城館跡分布調査報告書Ⅰ』地名表・分布地図編 長崎県文化財調査報告書第206集（長崎県教育委員会 二〇一〇）
- (2) 素掘りの柱穴に柱を立てつくられた建物跡で、古代から中世の一般的な建物の遺構である。中世の城館の建物はほとんどが掘立柱建物である。
- (3) 曲輪（本丸・二の丸等）「丸」に相当する城内の平坦な空間を区画したり分断するため、峰や尾根を掘で切った山城特有の防御手段。これを設けることにより尾根筋からの連続性を意図的になくすことができ、敵の侵入を阻むことができる。
- (4) 外敵の侵入を防ぐため斜面を削り人工的に断崖とした構造。
- (5) 人頭大程度の石をほぼ垂直に二、三段から高さ一、二メートル程度積み上げた構造で、隅角石や裏込が不明確で、近世城郭に見られる高石垣とは異なるものとして使い分けている。
- (6) 曲輪が一つだけの城館の形態。
- (7) 連続する曲輪が配置されている城館の形態。
- (8) 円形の曲輪を有する城館としては、平戸市の館山や籠手田城、佐世保市の針尾城や井手平城、西海市太田和氏館、吉崎市高津城などがあり、松浦党に関係する館が多い。
- (9) 等高線に沿って、曲輪を囲むようにある堀。
- (10) 同じ高さの曲輪が並ぶ城館の形態。
- (11) 城や砦、城下町一帯を含めて、堀や石垣、土塁などで囲い込んだ城郭構造。
- (12) 古代から中世にかけて使われた一辺一町（約一〇九メートル）の四角を基準とする土地区画制度。
- (13) 大村市教育委員会編『黒丸遺跡ほか発掘調査概報』51 大村市文化財調査報告書第28集（大村市教育委員会 二〇〇五）
- (14) 今富城の南側の佐奈川内川流域に面する低丘陵先端部に尾崎城があったといわれる。現在は住宅地となっており、城の面影はほとんど見られない。また、先端部はもともとこんもりとした高まりがあったが、造成して掘削されたという話である。今富城との位置を考慮すると、南側の警護を意識して同時期につくられた城の可能性が高い。
- (15) 大村市教育委員会編『今富城跡』大村市文化財調査報告書第32集（大村市教育委員会 二〇〇八）
- (16) 藤野 保編『大村郷村記』第一巻（国書刊行会 一九八二）の中の「第二大村（久原・池田）古城蹟古館蹟之事」の三城の古城蹟の



中に記述あり。

敵の側面から矢を射ること、またそのための城郭の構造。

〔17〕大村市教育委員会編『黒丸遺跡ほか発掘調査概報<0>23』大村市文化財調査報告書第25集（大村市教育委員会 二〇〇三）

〔18〕大村市教育委員会編『黒丸遺跡ほか発掘調査概報<0>24』大村市文化財調査報告書第27集（大村市教育委員会 二〇〇四）

〔19〕豊臣秀吉の朝鮮出兵の際に参加した各地の大名らが、その経験から各領地で城の普請を行っている。長崎県内においては、ほかに平戸松浦氏の日の嶽城（亀岳城）、有馬氏の原城、宇久氏（後の五島氏）の江川城がある。

〔20〕市の所有地であったことから、大村市教育委員会に連絡あり。現地確認と同時に『大村郷村記』の記載内容を確認し間違いを確認した。

〔21〕標高の高い方から低い方へ、等高線に直交するように下るす堀。

〔22〕峰城は大村市田下町に所在する平山城であり、尾上城や中構城などとも呼ばれている。鹿島へ通じる往還沿いの河岸段丘上の微高地にあり、現在は宅地や神社となっており城の痕跡は残さない。『大村郷村記』には、峰の古城として「四方高石垣にて、門の左右に櫓門枳形今に現存す。後は大河なり。」とあり、編纂された江戸時代末期頃までは城の面影があったことがうかがわれる。大村純伊の頃、有馬貴純との戦いの中でこの城に籠もったが、敗北した後の文明一四年（一四八二）、呼子の加々良島に潜居したといわれている。現地は中央に氷川神社が鎮座し、その周囲に宅地が集まっており、城の遺構は残存しない。ただ、後背地には郡川が流れており、天然の堀として機能している。地形から判断すると大村市役所萱瀬出張所の裏側に石垣が張り出した地形があり、外郭の一部が残っていると推測される。

〔23〕西海市の太田和氏館に下り、山城、佐世保市は吉岐の指方城と貴船神社などが確認されている。

〔24〕鈴田川の対岸に岩松城がある。大村市岩松町に所在する山城であり、以前は針尾河内古城と呼ばれていた。『大村郷村記』には「南北貳拾貳間（約四〇<sup>メートル</sup>）、東西拾六間（約三〇<sup>メートル</sup>）」とあり、堀切が二カ所あったことも記されている。多良山系から鈴田川流域に突出する丘陵上に所在するといわれているが、その厳密な場所については明確ではない。丘陵の先端に平場と切岸があり、祠が残る場所が推定地とされているが明らかではない。文明年間（十五世紀後半）はこの地の豪族である鈴田道意の居城であり、有馬貴純が大村の地に侵入した際にこの地に立て籠もり有馬勢を防いだといわれている。また、周辺には鈴田氏の城として白鳥城があるが、岩松城同様、今はその形状を見ることはできない。

〔25〕七浄寺跡墓地として、第六章第三節第一項四に記述あり。

27 佐世保市教育委員会編『針尾城』平成十六年度佐世保市埋蔵文化財発掘調査報告書(佐世保市教育委員会 二〇〇五)

参考文献

藤野 保編『大村郷村記』第一卷～第三卷(国書刊行会 一九八一)

長崎県教育委員会編『長崎県中近世城館跡分布調査報告書Ⅱ』詳説編 長崎県文化財調査報告書第207集 (長崎県教育委員会 二〇一一)